博士論文

温室効果ガス観測衛星を用いた エアロゾル高濃度域における CO₂ 濃度導出手法の改良 (Improvement of CO₂ retrieval method

using greenhouse gas observing satellite over aerosol dense areas)

岩崎 千沙

学位論文

温室効果ガス観測衛星を用いた

エアロゾル高濃度域における CO2 濃度導出手法の改良

(Improvement of CO2 retrieval method

using greenhouse gas observing satellite over aerosol dense areas)

2018年12月 博士 (環境学) 申請

東京大学大学院 新領域創成科学研究科 自然環境学専攻

岩崎 千沙

要旨

Greenhouse Gases Observing Satellite (GOSAT) は、温室効果ガスを観測することを主目的 とした日本の人工衛星であり、大気中の二酸化炭素 (CO2) とメタン (CH4) を観測している。 Photon path length Probability Density Function-Simultaneous (PPDF-S) 法は、GOSAT の短波長 赤外域 (Short Wavelength InfraRed: SWIR) で観測された放射輝度スペクトルから CO2と CH4 の気柱平均濃度 (それぞれ XCO₂, XCH₄) を導出 (リトリーバル) するための手法の 1 つで ある。この手法では、誤差要因となる大気中の雲/エアロゾルによる光の反射/多重散乱に伴 う光路長変動を、独自の PPDF パラメータを用いて、大気透過率の変化として表す。これま での XCO₂ XCH₄ の導出アルゴリズムの多くは、厳密な放射伝達計算によって光の反射/多 重散乱を取り扱う、いわゆる Full Physics (FP) 法に基づいてきた。それに対し PPDF-S 法は 解析精度を維持したまま高速計算 (一般に FP 法より 1 桁以上高速) が可能な新たな手法と して期待されている。本研究では、様々なタイプのエアロゾルおよび地表面反射率の観測条 件に対するシミュレーションに基づき、解析された CO2 濃度の鉛直プロファイルの形を解 析誤差の指標として PPDF-S 法の改良を図った。まず、リトリーバルに用いる波長チャンネ ルの選択である。GOSATの観測波長帯である 1.6μm 帯と 2.0μm 帯の CO2 吸収帯のチャンネ ルに対し、各大気層での濃度変化が観測スペクトルに与える影響を評価する指標 (dTr/dz) を導入し、チャンネルの選択を行った。できるだけ各大気層に感度ピークを持つ波長を均等 に選択することで解を安定化し、バイアスが小さくなるケースもあるものの、全体として情 報含有量が減り、大気全層の CO2 濃度変化に対して有意な解析結果とならないことが示さ れたため、本研究ではチャンネル選択を実施しないという結論に達した。 次に、解析パラメ ータの適正化である。PPDF-S 法では、CO2 濃度と同時に PPDF パラメータがリトリーバル されるが、PPDF パラメータの初期値への拘束条件が必要以上に緩いと解が適切な値から大 きく離れ、CO2 濃度のリトリーバル結果に影響を与える。そこで、その影響の大きさを、 PPDF パラメータの変動幅に対応した放射輝度の大きさによって評価し、影響の大きいパラ メータを見つけ、これを適正化した。この改良は、特にエアロゾルを含む大気でのリトリー バル解析に対して有用であった。これらの結果を踏まえ、パラメータ適正化後の PPDF-S 法 を西シベリア域のバイオマス・バーニング発生域で観測された GOSAT データの解析に適用 した。その結果、煙の存在する条件下でもリトリーバルできているケースも含め、これまで 解が得られず解析できなかったデータに対し、リトリーバル可能となったデータ数が約 70 %と大幅に増加した。さらに、シミュレーション解析と GOSAT データ解析の結果より、 XCO₂と同時に解析された PPDF パラメータの値によって、CO₂解析に影響を与えたエアロ ゾル種を特定できる可能性があることが示唆された。この判定により、Dust-like タイプまた は Soot タイプのエアロゾルを含む大気と特定された場合に対し、さらなる解析精度を向上 させるアルゴリズムを提案した。本研究で改良した PPDF-S 法は、2018 年 10 月に打ち上げ られた GOSAT-2 のデータ解析にも適用されることが期待されている。特に、GOSAT-2 で新

たに観測対象となった一酸化炭素 (CO) と、CO₂、エアロゾルとの観測を同時に行えれば、 ガスとエアロゾルが多く発生する地域で CO₂:CO:エアロゾル比という炭素収支解析にお いて重要な情報が得られるようになるものと期待される。

Abstract

Greenhouse Gases Observing Satellite (GOSAT) is a Japanese satellite whose main purpose is to observe greenhouse gases, carbon dioxide (CO₂) and methane (CH₄). Photon path length probability density function - Simultaneous (PPDF-S) method is one of the GOSAT retrieval methods to derive column average concentration of CO₂ (XCO₂) and CH₄ (XCH₄) from Short Wavelength InfraRed (SWIR) of GOSAT data. For the retrieval from SWIR, the main analysis error is the optical path length modification caused by light reflection/multiple scattering by clouds/aerosols in the atmosphere. In the PPDF-S method, these optical processes are expressed as a change of atmospheric transmittance using unique PPDF parameters. Many of the retrieval algorithms of XCO₂ and XCH₄ have been based on the so-called Full Physics (FP) method which deals with light reflection/multiple scattering by exact radiation transfer calculation. On the other hand, the PPDF-S method is expected as a new method which is capable of high-speed calculation maintaining analysis accuracy. In this study, we tried to improve the PPDF-S method referring to the vertical profile of the retrieved CO_2 vertical profiles as an index of analysis error based on the simulation for observation conditions of various types of aerosols and surface albedos. The first improvement is the selection of the wavelength channel used for the retrieval. We introduced an index for evaluating the influence of concentration change in each atmospheric layer on the observation spectrum, dTr/dz, for the GOSAT measurement channels in the CO₂ absorption bands of 1.6 μ m and 2.0 μ m, and then the channel selection has been executed. As a result, although the sensitivity of the CO_2 vertical profile could be changed depending on the combination of channels, it was not possible to obtain low-biased results for the whole atmosphere. The next improvement is the optimization of the analysis parameters. In the PPDF-S method, the PPDF parameter is retrieved at the same time as the CO₂ concentration. However, if the constraint condition on the a priori value of the PPDF parameter is looser than necessary, the solution can take errata value and can affect the retrieval result of the CO₂ concentration. Therefore, the magnitude of the influence was evaluated by the magnitude of the radiance corresponding to the variance range of the PPDF parameter, and then the parameter having a large influence was found and optimized. This improvement was particularly useful for retrieval analysis in the atmosphere including aerosol. Based on these simulation results, the improved PPDF-S method was applied to the analysis of GOSAT data observed in the region of biomass burning in Western Siberia. As a result, the number of data that became retrievable has increased by about 70 % to the data which could not be analyzed until now, including cases where retrieval was possible under the condition that smoke existed. Furthermore, from the results of the simulation study and the GOSAT data analysis, it was suggested that the value of PPDF parameter analyzed simultaneously with XCO₂ may be able to identify aerosol species that affected CO₂ analysis. Once it is determined as the atmosphere including Dust-like or Soot type aerosols, we can apply an additional algorithm to improve the analysis accuracy furthermore. The PPDF-S method improved in this research is expected to be applied to data analysis of GOSAT-2

launched in October 2018. Especially, if we can simultaneously observe carbon monoxide (CO) which was newly observed by GOSAT-2, important information for the biomass burning process such as CO₂: CO: aerosols ratio can be obtained in the areas where many gas and aerosol are generated. These studies are expected to contribute to the progress of the carbon-cycle sciences.

目次

1	研究背景	2
	1.1 温室効果ガスの衛星観測	2
	1.2 温室効果ガス観測技術衛星 GOSAT	6
	1.3 GOSAT の SWIR スペクトルからガス濃度をリトリーバルする手法	8
	1.4 本研究の目的	10
2	PPDF-S 法	12
	2.1 原理	12
	2.2 開発の歴史	14
	2.3 現状のパフォーマンス	15
3	PPDF-S 法の改良	18
	3.1 リトリーバルの基本式とリトリーバル・アルゴリズム	
	3.2 シミュレーション解析に基づく CO ₂ リトリーバル	21
	3.3 改良の方法	23
	3.3.1 チャンネル選択	24
	3.3.2 解析パラメータの適正化	25
4	- 改良の結果	27
	4.1 チャンネル選択の結果	27
	4.2 解析パラメータの適正化の結果	
	4.2.1 σaを適正化するパラメータの決定	31
	4.2.2 清浄大気への適用	32
	4.2.3 エアロゾルを含む大気への適用	34
5	GOSAT データ解析への応用	40
	5.1 清浄大気	40
	5.1.1 TCCON データによる検証結果	40
	5.1.2 Yekaterinburg でのデータによる検証結果	41
	5.2 エアロゾルを含む大気	42
	5.2.1 西シベリア域のバイオマス・バーニング発生地域	
	5.2.2 XCO2解析結果	44
	5.2.3 PPDF パラメータ解析結果	
	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	

5.2.4 PPDF パラメータによって表されるエアロゾルの光学的特性	
6 議論	51
7 結論	63
参考文献	66
謝辞	73

1 研究背景

1.1 温室効果ガスの衛星観測

産業革命以降、人間活動の増加に伴う化石燃料の燃焼や土地利用の変化により、人為起源の温室効果ガスの大気中濃度が急増している。代表的な温室効果ガスである二酸化炭素(CO₂)、メタン(CH₄)、一酸化二窒素(N₂O)の濃度は、それぞれ1750年で278±5 ppm (parts per million; 100万分の1)、722±25 ppb (parts per billion; 10億分の1)、270±7 ppb であったのに対し、2011年には390.5±0.1 ppm、1803±4 ppb、342.2±0.2 ppb へと増加している。地球温暖化によって気候変動が生じた結果、洪水、台風、ハリケーンの増加、干ばつの発生、さらに海水面の上昇といった現象が引き起こされ、地球上生物に甚大な被害をもたらすことが大問題とされている。この地球温暖化の要因は人為起源の温室効果ガスの増加による可能性が極めて高いとされている(IPCC AR4)。なかでも、CO₂は特に重要な温室効果ガスである。ある物質の気候変動への影響の大きさは放射強制力という指標によって表され、その値が正であれば対流圏界面以下の大気を加熱する働きを、負であれば冷却する働きを示すよう定義されている。Figure 1 は各因子の変動を 1750年からの変化として定義したときの放射強制力の大きさを示しており、CO₂がもつ放射強制力による影響は他のガスと比べて2倍以上大きな正の値であることがわかる。そのため、1997年に京都議定書が採択されたのを皮切りに、CO₂削減は近年の世界各国共通の重要な課題となっている。



Fig. 1. 各種気候変動因子の放射強制力 (IPCC AR4, 2007)

人為起源の CO₂ は約 45 %が大気中に残り、約 55 %が陸と海に吸収されるという大まかな 循環はわかっているものの、地域的な分布、発生・消失量、時間的変動性には大きな不確定 性がある。そこで、CO₂を地上の現場で測定し、時空間変動を明らかにする試みがなされて きた (Baker et al., 2006)。現場測定は、約 0.025% (約 0.1ppmv) という非常に高精度な観測が 可能であるため、その場での濃度変動を厳密に捉えることができる。しかし、CO₂の観測サ イトは陸上の、しかも先進国に多く分布しており地域的な偏りが大きく、さらには海上全域 にわたって定点観測サイトがほとんどないという問題点がある。そのため、大幅な観測点の 増加を目的に、莫大なコストはかかるものの、全球規模での定期的な測定が可能である衛星 観測が有用であるとされてきた。

このような背景のもと、1990 年代より衛星センサによって観測された熱赤外 (Thermal InfraRed: TIR) スペクトルから CO2濃度を導出する試みが始まった。Chédin et al. (2003) は 初めて TIR スペクトルから CO2の信号を検出した。これは High-Resolution Infrared Radiation Sounder (HIRS) で測定されたスペクトルが上部対流圏の CO2 濃度変化に感度をもつことを 示したものである。さらに Chédin et al. (2005) により、その方法が CO2のソース/シンク解 析に有用であることが示された。これらの研究に続いて、同様のタイプのセンサを用いて多 くの研究が行われてきた。以下はそれら衛星センサの例である; Advanced Earth Observing Satellite (ADEOS) 搭載の Interferometric Monitor for Greenhouse gases (IMG) センサ (Imasu et al., 2000;Ota and Imasu, 2016), Meteorological Operational Satellite Program of Europe (MetOp) $\stackrel{\scriptstyle \sim}{\succ}$ リーズ搭載の Infrared Atmospheric Sounding Interferometer (IASI) センサ (Chevallier et al., 2009b)、Earth Observing System (EOS)-B 搭載の Tropospheric Emissions Spectrometer (TES) セ ンサ (Kulawik et al., 2010), Aqua 搭載の Atmospheric Infrared Sounder (AIRS) センサ (Chahine et al., 2006)、そして温室効果ガス観測技術衛星 (Greenhouse Gases Observing Satellite: GOSAT) 搭載の Thermal And Near-infrared Sensor for carbon Observation-Fourier Transform Spectrometer (TANSO-FTS) センサ (Saitoh et al., 2009; Saitoh et al., 2016)。なお、GOSAT 搭載の TANSO-FTS センサの TIR バンドは補助的な位置づけにあるが、詳細は 1.2 節で述べる。

これら TIR センサは、一般に上層大気中の CO₂ 濃度に対する感度があるが、表面付近で は感度が比較的低い。この点は、CO₂発生源や吸収源の大部分が表面近くに位置しているこ とから、CO₂の地表面での正味フラックスの研究にとっては不利である。CO₂の地表面での 正味フラックスとは、単位時間・単位面積当たりの CO₂ 排出量と消失量のトータル量を指 す。これを推定する方法の一つとして、CO₂濃度の解析結果と大気輸送モデルとを組み合わ せる方法があり、その解析はインバージョン解析と呼ばれる。例えば、対流圏上部 (~150hPa) に感度をもつ AIRS センサからの CO₂濃度をインバージョン解析した地表面フラックスは、 地上のサンプリング観測データを用いたインバージョン結果に対して低い値を示すという ような研究例もある (Chevallier et al., 2009a)。また、より高度の低い対流圏中部 (~550hPa) に感度をもつ TES センサからの CO₂濃度データを用いたインバージョン解析では、南アメ リカなどで地表面フラックスの拘束を改善できたことが報告されている (Nassar et al., 2011)。

TIR に対し、短波長赤外域 (Short Wavelength InfraRed: SWIR) は、表面付近の CO2 濃度変 化により敏感である。SWIR で観測されたスペクトルからは CO2の気中平均濃度 (XCO2)を 導出することができる。 最初に SWIR スペクトルから XCO₂を導出するのに成功した衛星セ ンサは Environmental Satellite (ENVISAT) 搭載の Scanning Imaging Absorption Spectrometer for Atmospheric Chartography (SCIAMACHY) である (Buchwitz et al., 2005)。ただし、 SCIAMACHY の目的は CO₂、CH₄ を含む対流圏と成層圏の多種多様な微量ガスを全球観測 することであり、その設計は CO2の観測には最適化されていなかった。一方、GOSAT は温 室効果ガスの観測を主目的とする世界初の衛星であり、搭載する Thermal and Near-infrared Sensor for carbon Observation - Fourier Transform Spectrometer (TANSO- FTS) センサで大気中 の CO₂ とメタン (CH₄)を観測している (Yokota et al., 2009)。さらに、2018 年 10 月 29 日に は GOSAT の 2 号機である GOSAT-2 の打ち上げが成功した。GOSAT-2 は 1 号機よりも高精 度なスペクトル観測が可能であり、新たに一酸化炭素 (CO) も観測することから、今後、温 室効果ガスに対する科学的知見がより深まることが期待されている。他にも各国から CO2 観測を目的として SWIR スペクトルを取得する衛星が打ち上げられている。現在運用中ま たは打ち上げ予定の SWIR を観測する衛星を Table 1 に示す。なお、GOSAT は SWIR (Band 1,2,3) と TIR (Band 4) の両波長帯を観測するため、どちらの観測帯も Table 1 に記載する。 SWIR の特徴として、そのバンドを利用することで、鉛直方向に積分した CO2の信号を得る ことができる。しかし、そのスペクトルは大気中の雲およびエアロゾルに起因する光の反射 /多重散乱の影響を受けやすいという性質ももつ。そのため、SWIR から XCO2を正確に導出 するためには、その影響を考慮した解析を行う必要がある。

衛星	開発機関	観測波長帯 [µm]	観測対象ガス	プロダクト	関連文献	
	環境省;	Band1: 0.758~0.775	O ₂	$XCO_2 \cdot XCH_4$,		
	国立環境研	Band2: 1.56~1.72	CO ₂ , CH ₄	CO ₂ ・CH ₄ 鉛直	Yokota et al.	
GOSAT	究所;	Band3: 1.92~2.08	CO ₂ , H ₂ O	プロファイル	(2009);Kuze et	
(2009.01.23-)	JAXA ¹		CO2, CH4 CO2・CH4 鉛直 al. (2009) プロファイル	al. (2009)		
	(日本)	Band4: 5.56~14.3		プロファイル		
	環境省:	Band1: 0.758~0.775	O ₂	$XCO_2 \cdot XCH_4$,		
		Band2: 1.56~1.69	CO ₂ , CH ₄ , H ₂ O	CO ₂ ・CH ₄ 鉛直		
	国立環境研	Band3: 1.92~2.38	CO ₂ , CO, H ₂ O	プロファイル		
GOSAT-2	究所; JAXA ¹ (日本)	Band4: 5.5~8.4 CH ₄ ,		CH4 鉛直プロ	-	
(2018.10.29-)			CH ₄ , H ₂ O	ファイル		
			CO ₂ 鉛直プロ			
		Band5: 8.4~14.3	CO_2, O_3	ファイル		
	NASA ³ (アメリカ)	O ₂ -A band:	0	- XCO ₂ , CO ₂ 鉛直プロ ファイル	Boesch et al. (2015)	
		0.757~0.775	O_2			
OCO-2 ²		CO2の弱吸収帯:				
(2014.7.2~)		1.594~1.627	- CO2			
		CO2の強吸収帯:	002			
		2.043~2.087				
	MOST ⁵ ;	O ₂ -A band:	O ₂			
	CIOMP/CAS	0.758~0.778	-2	- XCO ₂ .	Yang et al.	
TanSat ⁴	6,	CO ₂ の弱吸収帯:		CO ₂ 鉛直プロ Ya ファイル (2)		
(2016.12.21~)	SIMIT ⁷ ; NSMC ⁸ (中国)	1.594~1.624	- CO ₂		(2018)	
		CO ₂ の強吸収帯:				
		2.042~2.082				
	at ⁹ げ子 ESA ¹⁰ (欧州)	O ₂ -A band:	O_2	- XCO ₂ , CO ₂ 鉛直プロ Bovens ファイル al.(20		
CarbonSat ⁹		0.757~0.775				
(打ち上げ予					Bovensmann et	
定)		1.559~1.675	- CO ₂		al. (2010)	
		CO ₂ の強败収帯:				
		2.043~2.095				

Table 1. 現在運用中または打ち上げ予定の SWIR スペクトルを取得する衛星

1 JAXA: Japan Aerospace eXploration Agency (宇宙航空研究開発機構)

2 OCO-2: Orbiting Carbon Observatory-2

3 NASA: National Aeronautics and Space Administration

4 TanSat: Chinese Carbon Dioxide Observation Satellite Mission

5 MOST: Ministry of Science and Technology

6 CIOMP/CAS: Changchun Institute of Optics, Fine Mechanics and Physics/Chinese Academy of Sciences

7 SIMIT: Shanghai Institute of Microsystems and Information Technology

8 NSMC: National Satellite Meteorological Center of CMA (China Meteorological Administration)

9 CarbonSat: Carbon Monitoring Satellite

10 ESA: European Space Agency

1.2 温室効果ガス観測技術衛星 GOSAT

GOSAT は世界初の温室効果ガスの観測を主目的とする日本の衛星であり、大気中の CO₂ とメタンを観測するために 2009 年 1 月 23 日に打ち上げられた。高度約 666 km を周回し、 3 日間の準回帰日数でほぼ全球を観測する。搭載センサは TANSO と呼ばれ、温室効果ガス 観測センサであるフーリエ変換型分光器 (FTS) と雲・エアロゾルセンサ (Cloud and Aerosol Imager: CAI) の 2 つのセンサで構成される (Kuze et al., 2009)。Figure 2 に GOSAT の外観を 示す。

GOSAT は 2009 年の打ち上げから 9 年以上観測を続けてきた。その結果、長年にわたって 蓄積されてきた観測データを解析することにより、CO₂ や CH₄ について様々な知見が得ら れてきた。その元となる観測データについて、解析の処理レベルに応じた様々なプロダクト が提供されている。これらは、公式なプロダクトとして、GOSAT プロダクト提供サイト GDAS (https://data2.gosat.nies.go.jp/) から提供されている。Figure 3 (a), (b) はそれぞれ CO₂、 CH₄の気柱平均濃度 (レベル 2 データ) の空間分布と全大気中の月平均濃度の経年変化であ る。同様に、観測点における気柱平均濃度に対して時空間内挿を施して得られた気柱平均濃 度 (レベル 3) の全球分布 (Fig. 3 (c)) や、風向、風速などの全球気象データと組み合わせる ことで推定した地域別の吸収・排出量 (レベル 4A) (Fig. 3 (d))、さらにそれに対して大気輸 送モデルを用いて時空間変動を再計算した濃度 (レベル 4B) (Fig. 3 (e)) なども GDAS より 入手可能である。





Fig. 3. GOSAT の観測からわかる CO₂、CH₄の情報; (a) 2013 年 8 月の晴天観測点における CO₂(左)とCH₄(右)の気柱平均濃度、(b) 2009 年からの CO₂(左)とCH₄(右)の全大気中 の月平均濃度の経年変化、(c)(a)に対して時空間内挿を施した CO₂(左)とCH₄(右)の気柱 平均濃度の全球分布、(d) 2012 年 8 月の CO₂の地域別の月平均吸収・排出量、(e)(d)を元に 再計算した 2012 年 8 月、高度約 800 mの CO₂の全球濃度分布。いずれの図も国立環境研究 所の GOSAT プロジェクトのホームページ (http://www.gosat.nies.go.jp/index.html)より入手。

1.3 GOSAT の SWIR スペクトルからガス濃度をリトリーバルする手法

多くの衛星センサが TIR または SWIR のいずれかのスペクトルを観測する一方、Table 1 に示すように、GOSAT は TANSO-FTS で SWIR (Band 1, 2, 3) と TIR (Band 4) の両方の波長 範囲で大気放射スペクトルを観測するため、両波長域を複合利用することで、より詳細なガ スの鉛直分布が明らかにされることが期待される。ただし、本研究では SWIR スペクトルの みからの XCO²導出に着目する。

ガスのリモートセンシング観測の分野では、センサで観測した放射輝度スペクトルから ガス濃度を導出する過程は、リトリーバルと呼ばれる。これまで、GOSATで観測された SWIR スペクトルから XCO₂をリトリーバルするために、様々な解析アルゴリズムが開発されてき た。前述の通り、SWIR スペクトルは光の反射/多重散乱の影響を受けやすいため、それらの 効果は解析誤差の要因となる。そのため、開発されてきた解析アルゴリズムごとに光の反射 /多重散乱過程を考慮する工夫がなされている。これらのアルゴリズムの多くは、いわゆる Full Physics (FP) 法に基づいており、国立環境研究所の GOSAT プロジェクトから公開され ている XCO₂の標準プロダクトを処理するために使用されるアルゴリズム (Table 2 に示す NIES アルゴリズム) も、FP 法に分類することができる。この手法では、雲/エアロゾルの微 物理とそれらの光学特性を考慮した放射伝達方程式を解くことによって、光反射/多重散乱 プロセスを厳密に計算する。FP 法を採用するアルゴリズムの例を Table 2 に示す。

アルゴリズム	研究機関	文献	アルゴリズムの詳細
NIES ¹	国立環境研究所 (日本)	Yoshida et al. (2010); Yoshida et al. (2011); Yoshida et al. (2013)	 GOSAT の CAI センサでの観測に基 づいた雲スクリーニング SPRINTARS モデルでシミュレーショ ンしたエアロゾル情報を取り入れた 厳密な放射伝達計算
ACOS ²	NASA JPL ³ (アメリカ)	Crisp et al. (2012); O'Dell et al. (2012)	 水雲、氷雲、広範囲の地域で見られる数種類のエアロゾルを想定した厳密な放射伝達計算
RemoTeC ⁴	SRON-KIT ⁵ (オランダ、 ドイツ)	Butz et al. (2009); Butz et al. (2011); Guerlet et al. (2013)	 GOSAT の CAI センサでの観測に基 づいた雲スクリーニング 鉛直方向にガウス分布である光学的 厚さをもつエアロゾルを取り入れた 厳密な放射伝達計算
UoL-FP ⁶	レスター大学 (イギリス)	Bösch et al. (2006); Boesch et al. (2011); Cogan et al. (2012)	 氷の巻雲、広範囲の地域で見られる 数種類のエアロゾルを想定した厳密 な放射伝達計算
YCAR-CAI ⁷	ヨンセイ大学 (韓国)	Kim et al. (2016);Jung et al. (2016)	 GOSAT の CAI センサでの観測に基 づいた雲スクリーニング 東アジアに特化したエアロゾル種を 想定した厳密な放射伝達計算

Table 2. FP 法に基づくリトリーバル・アルゴリズム

1 NIES: National Institute of Environmental Studies

2 ACOS: Atmospheric CO2 Observations from Space

3 JPL: Jet Propulsion Laboratory

4 Deutsche Forschungsgemeinschaft (DFG) through the Emmy-Noether programme, grant BU2599/1-1

5 SRON-KIT: Netherlands Institute for Space Research/Karlsruhe Institute of Technology

6 UoL-FP: University of Leicester Full Physics

7 YCAR-CAI: Yonsei Carbon Retrieval-Cloud and Aerosol Imager

一方、光反射/多重散乱に伴う光路長変動を光路長の確率密度関数 (Photon path length Probability Density Function: PPDF) に基づき、より簡略化する表現にした導出方法が提案されている (Bril et al., 2008;Oshchepkov et al., 2009;Oshchepkov et al., 2011;Oshchepkov et al., 2013b)。この方法では、光路長変動は独自の PPDF パラメータを用いた雲/エアロゾルを 含む大気透過率により表現され、厳密な放射伝達計算を必要としない。そのため高速計算が 可能であることから (計算速度は FP 法と比べて PPDF-S 法の方が1桁以上速い)、観測直後 のクイック・ルック用などにも利用できる。また、様々な改良を短時間でより容易に試すこ とができるといった利点をもつ。PPDF に基づく手法の詳細は、第2章で述べる。

GOSAT の打ち上げ当初、XCO₂のリトリーバル解析精度は1% (約4 ppm) が目指されて いた。この精度は、リトリーバル結果と大気輸送モデルを組み合わせて解析することで、 CO₂の地表面フラックスの推定が可能とされる精度である (Takagi et al., 2014)。その後、さ まざまなリトリーバル・アルゴリズムの改良が進められた結果、現状では約 0.1% (約 0.4 ppm) にまで精度が向上している (Morino et al., 2011;Yoshida et al., 2013;Oshchepkov et al., 2012;Oshchepkov et al., 2013a;Zhou et al., 2016;Iwasaki et al., 2017)。一方、地上でのガスのフラ スコ・サンプリングといった現場測定の精度は約 0.025% (約 0.1 ppm) であることから、今 後はさらなる改良や新しい手法によって、衛星観測でも同等の精度で全球の XCO₂を解析す ることを目指す段階にまできていると言える。

多くのリトリーバル・アルゴリズムが FP 法に基づくなか、FP 法に特有の誤差や問題もあ るため、異なる手法による解析結果と比較することは非常に有意である。PPDF に基づく手 法は GOSAT データを用いた研究コミュニティー内では、研究的課題の位置づけにあるもの の、新しい観点で SWIR からのリトリーバルに取り組むものであり、リトリーバルの精度向 上に対してブレークスルーを与え得るものとして期待されている。

PPDF に基づく手法の最新バージョンは PPDF-S 法と呼ばれ (詳細は第2章)、現在 GOSAT プロダクト提供サイト GDAS より、FP 法により解析された XCO₂の標準プロダクトと合わ せ、公募研究 (Research Announcement)の課題代表者 (Principal Investigator) に対してのみ、 PPDF-S 法による XCO₂の解析データが提供されている。本研究は、国立環境研究所と東京 大学大気海洋研究所の共同研究の枠組みの中で行われ、PPDF-S 法によるデータ解析処理の 実施や、解析結果の検証作業にも貢献してきた。それらの結果は、解析データやリトリーバ ル・アルゴリズム基準書 (Algorithm Theoretical Basis Document: ATBD) などの形で公開され ている。

1.4 本研究の目的

これまでの研究 (Iwasaki et al., 2017) では、NIES FP アルゴリズムで得られた XCO₂ と PPDF-S 法に基づくアルゴリズムによる XCO₂を比較すると、エアロゾル高濃度域で値の差 が大きいことが指摘されてきた (詳細は第 3 章)。この中で、両アルゴリズムでエアロゾル による光反射/多重散乱の効果を取り扱う方法が異なることが要因である可能性が示唆され た。一方、PPDF アルゴリズムは、エアロゾルの光学的特性によっては解が不安定になる場 合があることもわかり (詳細は第 4 章)、時に解が収束せずに解析データ数が減少する場合 もある。そこで、本研究の目的を、PPDF-S 法を改良し、高濃度エアロゾル域でも高精度に XCO₂を導出可能にすることとする。特に、基本的な考え方として、エアロゾルの有無、あ るいは、エアロゾルの種類によらず、汎用的に様々な大気状態に適用できる手法への改良を 目指す。その上で、エアロゾルの種類や特性に関する情報が得られれば、それを踏まえてよ り適切な手法を用いるというアルゴリズムを構築する。 本研究で改良した PPDF 法は、2018 年 10 月に打ち上げられた GOSAT-2 のデータ解析に も適用されることが期待されている。特に、新規に追加された測定波長帯により、新たに一 酸化炭素 (CO) も観測する。CO を CO₂と同時に観測することにより、物質の燃焼の仕方を 特徴付ける燃焼効率 (combustion efficiency) という指標の導出に繋げることができる (Kaufman et al., 1990;Super et al., 2016)。加えて同時に発生するエアロゾル種や量も判別でき れば、バイオマス・バーニング発生域や都市域といった、ガスとエアロゾルが同時に多く発 生する地域で観測されたデータから、CO₂: CO: エアロゾル比という炭素収支解析において 重要な情報が得られるようになるものと期待されている。

2 PPDF-S 法

2.1 原理

GOSAT 搭載の TANSO-FTS をはじめとする、大気中の気体成分を測定するために設計さ れたセンサの大半は、地球に入射する太陽光のうち地球大気または地表面で後方散乱され た放射輝度スペクトルを観測する。ただし、SWIR 域のスペクトルは大気中の雲/エアロゾル によって反射/多重散乱の影響を受ける。そのため、太陽と衛星のそれぞれの天頂角の大き さとエアロゾル層の高度で決まる幾何学的な光路長に対し、太陽光が地球に入射し GOSAT センサで感知されるまでに様々な長さの光路を辿り、光路長は複雑に変化する。そこで、 PPDF に基づくリトリーバルでは、光路長変動を透過率の変化として PPDF パラメータを用 いて表現することが考えられた。以下はそのために用いられる4つの基本的な PPDF パラメ ータである;

- *h*: 雲/エアロゾル層の高度
- α: 雲/エアロゾル層の反射率
- *ρ*: 雲/エアロゾル層と地面との間の平均経路長
- γ: 調整パラメータ

αとρの定義の模式図を Fig. 4 に示す。



Fig. 4. PPDF パラメータ *α*, *ρ*の定義の略図。黒色線は、幾何学的に決まる基本の光路長を 示す。青色線は *α*で表される光反射によって光路長が短くなった効果を表し、赤色線は、*ρ* で表される光の多重散乱によって光路長が長くなる効果を表す。 Oshchepkov et al. (2013b) は、Fig. 5 に示すような 3 層の大気モデルに対し、PPDF パラメ ータを用いて光路長変動を表現することを提案した。大気層を下から順に第 1, 2, 3 層とす ると、エアロゾル濃度は地表面近くで高いことを考慮し、第 1 層では大気分子によるレイリ ー散乱とエアロゾルによる散乱の影響を受ける層、第 2 層ではレイリー散乱の影響のみを 受ける層、そして第 3 層では散乱の影響を受けない層とし、各層での光路長変動を透過率の 変化として PPDF パラメータを用いて表現した。用いる PPDF パラメータは全部で 8 つあ り、そのうち、4 つの $h_n \alpha_n \rho_n \gamma_r$ はレイリー散乱に伴う反射/多重散乱の効果を、残り の 4 つのパラメータ $h_{\alpha} \alpha_{\alpha} \rho_{\alpha} \gamma_{\alpha}$ は大気中のエアロゾルによる効果を表す (ここでは、 雲は無いと仮定している)。そして、これらの PPDF パラメータを用いて、第 1 層の透過率 T_{α} 第 1+2 層の透過率 $T_{I_{\alpha}}$ 第 3 層の透過率 T_{3} を組み合わせることで、有効透過率 (Effective Transmittance) T_{eff} を表す。その表現式を式 (1)-(8) に示す。

$$T_{eff} = \alpha_r T_3 + (1 - \alpha_r) T_{12}^r T_a T_3,$$
(1)

$$T_3 = \exp\left[-C_{\mu}\tau_3\right],\tag{2}$$

$$T_{12}^{r} = \exp\left[-C_{\mu}\left(1+\delta_{r}\right)\tau_{12}\right],\tag{3}$$

$$T_a = (1 - \alpha_a) \exp\left[-C_{\mu} \tau_a \delta_a\right] + \alpha_a \exp\left[+C_{\mu} \tau_a\right]$$
(4)

ここで、

$$\delta_r = \rho_r \exp\left[-\gamma_r \tau_{12}\right],\tag{5}$$

$$\delta_a = \rho_a \exp\left[-\gamma_a \tau_a\right],\tag{6}$$

$$C_{\mu} = 1/\cos\theta + 1/\cos\theta_0, \tag{7}$$

$$\tau_a = \int_0^{h_a} k(h) dh, \quad \tau_{12} = \int_0^{h_r} k(h) dh, \quad \tau_3 = \int_{h_r}^{h_{TOA}} k(h) dh, \tag{8}$$

である。また、 $\theta \ge \theta_o$ はそれぞれ太陽天頂角と衛星天頂角、k(h)は高度 hにおけるガス 吸収係数、 h_{TOA} は大気上端の高度である。

また、Oshchepkov et al. (2013b) で提案された手法では、上記の式に基づき、ガス濃度と PPDF パラメータとが同時に (Simultaneously) 導出されるため、その手法は PPDF-Simultaneous (PPDF-S) 法と名付けられた。PPDF-S 法は、GOSAT のデータ解析に適用され る、PPDF に基づくリトリーバル手法の最新バージョンである。 PPDF-S 法の開発の歴史を 2.2 節で、その手法の現状の性能を 2.3 節で述べる。



Fig. 5. Oshchepkov et al., 2013b で定義された 3 層大気モデル。下から順に第 1, 2, 3 層とする と、*h*_rと *h*_uはそれぞれ第 1 層と第 2 層の層の上端高度である (Oshchepkov et al., 2018)。

2.2 開発の歴史

PPDF に基づくリトリーバル手法の開発は、GOSAT の SWIR スペクトル解析への適用を 目的に国立環境研究所で開発が開始された。まず、モンテカルロ・シミュレーションによっ て光子の軌道を統計的に解析し、その結果に基づいて 4 つの PPDF パラメータである h, α , ρ , γ が導入された (Bril et al., 2007)。次に Oshchepkov et al. (2008) は、XCO₂ リトリーバル のために PPDF パラメータを利用し、PPDF に基づくリトリーバル手法の基礎を確立した。 そして、砂漠ダストエアロゾルを含む大気への施用のために改良された後 (Bril et al., 2008)、 それは 3 層の大気モデルに適用された (Oshchepkov et al., 2009)。さらに、その手法は Oshchepkov et al. (2011)によって GOSAT のデータ解析に用いられた。Bril et al. (2012) では、 GOSAT の海上データからも XCO₂を導出している。

ここまでの手法の解析精度を評価するため、Oshchepkov et al. (2012) は、地上観測から得 られた XCO₂ データとの比較により、GOSAT データからリトリーバルされた XCO₂ の結果 を検証した。なお、用いられた地上観測データは、GOSAT の TANSO-FTS センサと同じよ うにフーリエ分光器を用いて、地上から XCO₂ を測定する Total Carbon Column Observing Network (TCCON) (Wunch et al., 2011) の 12 サイトから提供されたデータである。検証の結 果、PPDF に基づく手法で導出された XCO₂ が-0.43ppm のバイアスをもち、その標準偏差は 1.80ppm であると報告した。また、PPDF パラメータにより表される光路長変動の効果は、 エアロゾルの輸送モデルから導出されたエアロゾル光学的厚さの季節トレンドと、宇宙か らのライダー観測からわかった巻雲の光学的厚さの時間変動と整合的であることも示した。 さらに、Oshchepkov et al. (2013a) は、PPDF に基づくリトリーバル結果と、FP 法に基づく 様々なリトリーバル・アルゴリズムによって導出された XCO₂の結果を相互比較した。その 結果、TCCON 12 サイトのデータとの比較による検証結果は、PPDF に基づく手法で導出さ れた XCO₂は、他の FP 法に基づいたリトリーバル・アルゴリズムに対して遜色ない解析精 度をもつことを示した。

そして、Oshchepkov et al. (2013b) により 2.1 節で示した PPDF-S 法が開発され、そのリト リーバル結果は 12 サイトの TCCON データと比較し検証された。その結果、XCO₂ バイア スは 0.08ppm、その標準偏差は 1.90ppm であると報告した。

2.3 現状のパフォーマンス

Iwasaki et al. (2017) は PPDF-S 法で導出された XCO₂ と XCH₄の解析期間を拡大し、それ らの精度と全球での特性について評価した。精度評価は、先行研究に倣い TCCON のデー タとの比較による検証結果によって議論した。用いた TCCON データは Table 3 で示す 11 サ イトで得られたデータであり、緯度・経度差が 2°以内、観測時間差が 30 分以内の GOSAT データからリトリーバルされた XCO₂, XCH₄の値と比較した。その結果、XCO₂のバイアス とその標準偏差はそれぞれ、0.73 ppm と 1.83 ppm、また XCH₄については 0.66 ppb と 15.41 ppb であることを示した。比較のため、FP 法により導出された、国立環境研究所から提供さ れているレベル 2 (L2) データのうち、GOSAT の標準プロダクトである一般ユーザー (General Users: GU) 向けのプロダクト (GU プロダクト) も同様に検証した。その結果、 PPDF-S 法で導出されたデータの精度は、GU プロダクトのそれとほぼ同等であった。

Site	Latitude	Longitude	Dataset reference	TCC0N software version and release number
Bialystok	53.23°N,	23.03°E	Deutscher et al., 2015. doi:10.14291/tccon.ggg2014.bialystok01.R1/1183984.	GGG2014.R1
Bremen	53.10°N,	8.85°E	Notholt et al., 2014. doi:10.14291/tccon.ggg2014.bremen01.R0/1149275.	GGG2014.R0
Garmisch	47.48°N,	11.06°E	Sussmann et al., 2014. doi:10.14291/tecon.ggg2014.garmisch01.R0/1149299.	GGG2014.R0
Orléans	47.97°N,	2.11°E	Warneke et al., 2014. doi:10.14291/tecon.ggg2014.orleans01.R0/1149276.	GGG2014.R0
Lamont	36.60°N,	97.49°W	Wennberg et al., 2016. doi:10.14 291/tccon.ggg2014.lamont01.R1/1255070.	GGG2014.R1
Park Falls	67.37°N,	90.27°W	Wennberg et al., 2014. doi:10.14291/tecon.ggg2014.parkfalls01.R0/1149161.	GGG2014.R0
Sodankylä	67.37°N,	26.63°E	Kivi et al., 2014. doi:10.14291/tecon.ggg2014.sodankyla01.R0/1149280.	GGG2014.R0
Tsukuba125HR	36.05°N,	140.12°E	Morino et al., 2016. doi:10.14291/tecon.ggg2014.tsukuba02.R1/1241486.	GGG2014.R1
Darwin	12.43°S,	130.89°E	Griffith et al., 2014a. doi:10.14291/tecon.ggg2014.darwin01.R0/1149290.	GGG2014.R0
Lauder125HR	45.05°S,	169.68°E	Sherlock et al., 2014. doi:10.14291/tecon.ggg2014.lauder02.R0/1149298.	GGG2014.R0
Wollongong	34.41°S,	150.88°E	Griffith et al., 2014b. doi:10.14291/tccon.ggg2014.wollongong01.R0/1149291.	GGG2014.R0

Table 3. 用いた TCCON データ (Iwasaki et al. 2017)

以上のようにバイアスと標準偏差を評価した上で、FP 法と PPDF-S 法でのリトリーバル 結果の違いを全球的に把握することを目的とし、GU プロダクトと、PPDF-S 法に基づく XCO₂, XCH₄データの値の差の全球分布を作成した (Fig. 6)。その結果、アフリカ大陸中央部 とシベリア全域のバイオマス・バーニング発生地域において、両手法間で XCO₂ と XCH₄ に 大きな差が見られた。バイオマス・バーニングは植物や森林など生物由来のものが燃焼する 現象で、ガスとともにススなどのエアロゾルも多く発生する。そのため、この地域で見られ た両手法間での差は、FP 法と PPDF-S 法とでエアロゾルによる光の反射/多重散乱の効果の 取り扱い方法が異なることが原因である可能性があることがわかった。

エアロゾルの光学的厚さ (Aerosol Optical Thickness: AOT) はエアロゾル濃度の指標とし て用いられるが、大きな値の AOT が観察されたときの XCO₂の解析精度も検証した。ここ では、GU プロダクト同様、FP 法で導出され L2 データとして国立環境研究所から提供され ている データのうち、公募研究 (Research Announcement)の課題代表者 (Principal Investigator)向けのプロダクト (RA プロダクト)も用いられた。GU プロダクトは、AOT な どの大気パラメータ、地表面状態、放射パラメータなどを基準としたスクリーニング・テス トにより RA プロダクトから抽出されたデータである。そこで、AOT の値によるスクリー ニング・テストで落ちた (つまり、エアロゾル濃度が高い)RA プロダクトの XCO₂と、同じ シーンの PPDF-S 法で導出された XCO₂とを比べた。その結果、前者のバイアスとその標準 偏差はそれぞれ-1.27 ppm と 3.03 ppm であったのに対し、後者は 0.32 ppm と 1.47 ppm であ った。このように、後者の方が TCCON データとの差が小さかったことから、FP 法でエア ロゾルが多いと判断された状況において PPDF-S 法ではより精度良く解析が可能である場合があることが示唆された。

このように、エアロゾル高濃度域において、光の反射/多重散乱の取り扱い方法が FP 法と は異なる PPDF-S 法について、その高精度化を目指すことは、解析手法として多様なアプロ ーチを行うという観点からも重要である。本研究では、次章に示すシミュレーション解析に 従い、様々なエアロゾル大気・地表面に対して PPDF-S 法の解析精度を多角的に調べ、さら なる解析の精度向上を目指し PPDF-S 法の改良を試みた。



Fig. 6. GU プロダクトと PPDF-S 法に基づく解析結果の差。XCO₂(左) と(右)の全球分布 (Iwasaki et al. 2017)。

3 PPDF-S 法の改良

3.1 リトリーバルの基本式とリトリーバル・アルゴリズム

PPDF-S リトリーバル・アルゴリズムは、式(9)で定義される重み付き最小二乗差で表される評価関数 *J(x)*の値を最小にする最適推定法(Rodgers, 2000)に基づく。ここで、測定された放射輝度スペクトル *R*'、シミュレーションした放射輝度スペクトル *R'*、解析のターゲットである状態ベクトル x、xに対する先験値データ x_aである。また、*f(x)*は PPDF パラメータに基づいて観測される放射輝度を計算するフォワード・モデル、*S_y*は観測スペクトルの測定誤差の共分散行列、*S_a*は先験値がもつ誤差の共分散行列を表す。

$$J(R^{*}, x_{a}, x) = (Y^{*} - F(x))^{T} S_{y}^{-1} (Y^{*} - F(x)) + (x_{a} - x)^{T} S_{a}^{-1} (x_{a} - x),$$
(9)

$$\boldsymbol{Y}^{*} = -\ln(\boldsymbol{R}^{*}), \quad \boldsymbol{F}(\boldsymbol{x}) = -\ln(\boldsymbol{R}') = -\ln(f(\boldsymbol{x})), \quad (10)$$

ここで、

$$x = \begin{pmatrix} x_{gas} \\ x_{nongas} \end{pmatrix}, \quad S_a = \begin{pmatrix} S_{a,gas} & 0 \\ 0 & S_{a,nongas} \end{pmatrix}, \tag{11}$$

であり、状態ベクトル × は、各大気層における CO₂ 濃度に関する状態ベクトル ×_{gas} と、 h_n , α_n , ρ_n , γ_n , h_a , α_a , ρ_a , γ_a を含む他のパラメータに関する状態ベクトル ×_{nongas}によって 構成される。**S**_aも同様である。

Gauss-Newton 法に従って、解は反復的に得られ、反復回数 i+1 番目の **x**(**x**_{i+1}) は 1 つ前の 解析結果 (**x**_i) を用いて以下のように表される;

$$x_{i+1} = x_i + \left(K_i^T S_y^{-1} K_i + S_a^{-1}\right)^{-1} \left[K_i^T S_y^{-1} \left(Y * -F(x_i)\right) - S_a^{-1} \left(x_i - x_a\right)\right],$$
(12)

ここで **K**はヤコビアンと呼ばれ、**x**=**x**_iに関して以下の式で表される;

$$K_{i} = \frac{\partial F(x)}{\partial x} \bigg|_{x=x_{i}}.$$
(13)

ヤコビアンは、状態ベクトル × のある要素が変化したとき放射輝度のフォワード計算結果 にどれほど影響を与えるかの指標である。その式は、× の各要素に対して設定されており、 式 (13) は CO₂濃度、式 (14)-(17) は $\alpha_n \rho_n \gamma_n h_n$ 式 (18)-(21) は $\alpha_o \rho_o \gamma_o h_o$ に関す るヤコビアンである。

$$-\frac{\partial T_{eff}}{\partial x_{k^{*}}} = \begin{cases} C_{\mu}\tau_{k^{*}}^{\prime} \Big[\alpha_{U} + (1 - \alpha_{U})T_{12}^{U}T_{L} \Big] T_{3}, h_{k^{*}} \ge h_{U} \\ C_{\mu}\tau_{k^{*}}^{\prime} (1 - \alpha_{U})(1 + \delta_{U} - \gamma_{U}\tau_{12}\delta_{U})T_{12}^{U}T_{L}T_{3}, h_{L} \ge h_{k^{*}} > h_{U} \\ C_{\mu}\tau_{k^{*}}^{\prime} (1 - \alpha_{U})T_{12}^{U}T_{3} \times \\ \Big[(1 + \delta_{U} - \gamma_{U}\tau_{12})T_{L} + (1 - \alpha_{L})(\delta_{L} - \gamma_{L}\tau_{L}\delta_{L})\exp(-C_{\mu}\tau_{L}\delta_{L}) - \\ -\alpha_{L}\exp(C_{\mu}\tau_{L})\Big], h_{k^{*}} < h_{L} \end{cases}$$
(14)

$$\frac{\partial T_{eff}}{\partial \alpha_U} = T_3 - T_3 \cdot T_{12}^U \cdot T_L \tag{15}$$

$$\frac{\partial T_{eff}}{\partial \rho_U} = -(1 - \alpha_U) T_3 \cdot T_{12}^U \cdot T_L \cdot C_\mu \cdot \tau_{12} \cdot \exp(-\gamma_U \cdot \tau_{12})$$
(16)

$$\frac{\partial T_{eff}}{\partial \gamma_U} = \left(1 - \alpha_U\right) T_3 \cdot T_{12}^U \cdot T_L \cdot C_\mu \cdot \tau_{12}^2 \cdot \gamma_U \tag{17}$$

$$\frac{\partial T_{eff}}{\partial h_U} = T_3 \cdot C_\mu \cdot k \left(h_U \right) \cdot \left[\alpha_U - \left(1 - \alpha_U \right) \cdot T_{12}^U \cdot T_L \cdot \delta_U \cdot \left(1 - \gamma_U \cdot \tau_{12} \right) \right]$$
(18)

$$\frac{\partial T_{eff}}{\partial \alpha_L} = (1 - \alpha_U) \cdot T_3 \cdot T_{12}^U \left[\exp(C_\mu \tau_L) - \exp(-C_\mu \tau_L \delta_L) \right]$$
(19)

$$\frac{\partial T_{eff}}{\partial \rho_L} = -(1 - \alpha_U) \cdot (1 - \alpha_L) \cdot T_3 \cdot T_{12}^U \Big[C_\mu \tau_L \cdot \exp(-C_\mu \tau_L \delta_L) \cdot \exp(-\gamma_L \tau_L) \Big]$$
(20)

$$\frac{\partial T_{eff}}{\partial \gamma_L} = (1 - \alpha_U) (1 - \alpha_L) T_3 \cdot T_{12}^U \cdot C_\mu \cdot \tau_L^2 \cdot \delta_L \cdot \exp(-C_\mu \tau_L \delta_L)$$
(21)

$$\frac{\partial T_{eff}}{\partial h_L} = (1 - \alpha_L) \cdot T_{12}^U \cdot T_3 \cdot C_\mu \cdot k(h_L) \times \left[\alpha_L \exp(C_\mu \tau_L) - (1 - \alpha_L) \cdot \exp(-C_\mu \tau_L \delta_L) \cdot \delta_L \cdot (1 - \gamma_L \tau_L) \right]$$
(22)

上記の基本原理に基づいた PPDF-S リトリーバル・アルゴリズムのフローチャートを Fig. 7 に示す。そこに示されるように、シミュレーションにおいてリトリーバル結果を得るには 以下の手順の計算を行う。

(1) **x**の先験値データ **x**_aと GOSAT の観測に対応する地表面/大気状態を与え、PPDF パラメ ータに基づくフォワード計算で観測スペクトル **Y** に対応するスペクトル **F(x)** を計算 する

- (2) 式 (9) で示した評価関数 J(x) の値が最小になるよう x を更新する
- (3) この過程を、収束テストをクリアするまで繰り返し行う
- (4) 収束テストをクリアした後は情報含有量などのパラメータによるスクリーニング・テストを経て、リトリーバル結果を得る。

手順 (2) の × の更新では、パラメータの解析中での変化勾配を表すアジョイントの式を 用いる。アジョイントの式は、ヤコビアン同様、×の各要素に対して設定されており、CO₂ 濃度に関するアジョイントを A_{co2} また $\alpha_n \rho_n \gamma_n h_r$ に関するアジョイントを $A_{an} A_{\rho n}$ $A_{\gamma n} A_{hn}$ そして $\alpha_o \rho_o \gamma_o h_o$ に関するアジョイントを $A_{\alpha n} A_{\rho n} A_{\gamma n} A_{hr}$ とすると、それ ぞれ以下の式で表される;

$$A_{CO_2} = -\frac{\frac{\partial y}{\partial CO_2}}{a \, priori \, CO_2} \tag{23}$$

$$A_{\alpha_r} = -2 * x_{\alpha_r} * \left(\alpha_r' * \frac{\partial y}{\partial \alpha_r} + \rho_r' * \frac{\partial y}{\partial \rho_r} \right)$$
(24)

$$A_{\rho_r} = \frac{\rho_{rayl.-Band1}}{\alpha_{rayl.-Band1}} * \alpha_r * ScaleFactor_{\rho_r} * \frac{\partial y}{\partial \rho_r}$$
(25)

$$A_{\gamma_r} = -2 * \frac{\partial y}{\partial \gamma_r} * x_{\gamma_r} * (\gamma_r' - 2)$$
⁽²⁶⁾

$$A_{h_r} = \frac{\partial y}{\partial h_r} \tag{27}$$

$$A_{\alpha_{a}} = -2 * x_{\alpha_{a}} * \left(\alpha_{a}' * \frac{\partial y}{\partial \alpha_{a}} + \rho_{a}' * \frac{\partial y}{\partial \rho_{a}} \right)$$
(28)

$$A_{\rho_{a}} = \frac{\rho_{rayl.-Band1}}{\alpha_{rayl.-Band1}} * \alpha_{a} * ScaleFactor_{\rho_{a}} * \frac{\partial y}{\partial \rho_{a}}$$
(29)

$$A_{\gamma_a} = -2 * \frac{\partial y}{\partial \gamma_a} * x_{\gamma_a} * (\gamma'_a - 2)$$
(30)

$$A_{h_a} = \frac{\partial y}{\partial h_a} \tag{31}$$

(X':反復回数1回前のX)

また、手順(3)で反復計算する理由は、リトリーバル問題は非線形問題であるため、式(12) にある線形の逆行列計算1回だけの×の更新では最適解に近づかない可能性があるため、 複数回の更新によってより適正な値を得るためである。



Fig. 7. PPDF-S リトリーバル・アルゴリズムのフローチャート

3.2 シミュレーション解析に基づく CO₂ リトリーバル

PPDF-S 法によるリトリーバル精度を調べるために、以下に示すように放射輝度をシミュ レーションし、それに対してリトリーバル解析を行うという方法で精度評価を実施した。 解析では、まず、様々な大気条件と地表面特性を仮定した大気放射伝達モデルによって、式 (9) および Fig. 7 の Y[•]の観測輝度をシミュレーションし、計算した放射輝度から CO₂ 濃度 を導出した。最終的に、導出した XCO₂ からシミュレーションで真値として仮定した XCO₂ を引くことにより計算される XCO₂ バイアスの値によって、リトリーバル精度を評価した。

観測輝度のシミュレーション計算では、以下の気圧グリッドで大気を層分けした (単位は hPa); 0.1, 10, 20, 30, 50, 70, 100, 150, 200, 250, 300, 400, 500, 600, 700, 800, 850, 900, 925, 950, 975, 1000。その大気層に対するシミュレーションには、Table 4 に示す大気放射伝達モデル、

パラメータ設定およびデータセットを使用した。また、Table 4 に示す設定に加え、清浄大気 (エアロゾルが無い大気)の状態をエアロゾルの光学的厚さ (AOT)の値を 0.0 と設定することにより仮定した。以下、本文では、 x_a の各要素を x_a 、 S_y , S_a の各対角要素の平方根の値をそれぞれ σ_y 、 σ_a と記述する。

一方、式 (9) および Fig. 7 の F(x) は、リトリーバル・プロセスにおいて PPDF パラメー タを用いたフォワード計算により計算される。太陽入射光、太陽/衛星天頂角、地表面反射 率および大気プロファイルは、エアロゾルモデルを除いて Pstar3 によるシミュレーション に使用されるモデルや値と同じである。 PPDF に基づくフォワード計算では、光路長変動 は、エアロゾルモデルを用いず、PPDF パラメータを用いて表される有効透過率の変化とし て説明される。状態ベクトル x に含まれる各パラメータの先験値 (x_o) および偏差 (σ_o) を Table 5 に示す。また、 σ_y の値は以下の通りである。

> Band 1 $\mathcal{CO} \sigma_{y}: 4.0 \times 10^{-7} / SNR [W/m^{2}/str/cm^{-1}]$ Band 2 $\mathcal{CO} \sigma_{y}: 3.5 \times 10^{-7} / SNR [W/m^{2}/str/cm^{-1}]$ Band 3 $\mathcal{CO} \sigma_{y}: 2.5 \times 10^{-7} / SNR [W/m^{2}/str/cm^{-1}]$ SNR (Signal to Noise Ratio) = 400

Table 4. 放射輝度の計算に使用した大気放射伝達モデル、パラメータ設定およびデータセット

モデル、パラメータ、データセット	詳細	
大気放射伝達モデル	Polarization System for Transfer of Atmospheric Radiation3 (Pstar3) (Ota et al., 2010)	
太陽入射光	Band 1: Kurucz's model Band 2, 3: Toon's model	
天頂角	太陽: 30°/衛星: 0°	
地表面反射率	0.05~0.50 (波長依存性なし; Band 1, 2, 3 で共通の値)	
地表面気圧		
気温鉛直プロファイル	· ス家川の Grid Pointed Value (GPV) ケーダ	
水蒸気 (H2O) 鉛直プロファイル	- (夏の平祥反の人X(を似た)	
CO2鉛直プロファイル	鉛直一様に 390 ppm	
ガス吸収	HIgh resolution TRANsmission molecular absorption database	
	(HITRAN) 2004 を用いた Line-By-Line (LBL) 計算結果	
	(Rothman et al., 2005)	
エアロゾル種	Dust-like (土壌性), Urban (都市型), Rural (郊外型), Soot (スス)	
エアロゾルの光学的厚さ (AOT)	0.05~1.0 (0.55 μm における値)	

パラメータ	先験值 (xa)	偏差 (<i>σ</i> _o)
CO ₂	鉛直方向に一様に 385 ppm	$\begin{split} \sigma_{a}^{i,j} &= \left(\sigma_{a}^{i,i} \cdot \sigma_{a}^{j,j}\right)^{\frac{1}{2}} \exp\left[-0.5\left \ln\left(p_{i} / p_{j}\right)\right \right],\\ \text{ここで} &\sigma_{\sigma}^{,i} &= 6 \text{ ppm}, \ \rho_{i} \texttt{ki} \texttt{i} \text{ 番目の大気層での}\\ 氛圧である。 \end{split}$
h _r	5 km	0.001 km
$\beta_{\alpha r}{}^1$	$\sqrt{-\ln(\alpha_{r,Band1})} \times (\Gamma_i / \Gamma_1) \approx 2,$ ここで、 Γ_i is surface alb は Band i (i = 1, 2, 3) での地表面反射率である。	0.01
$\beta_{\rho r}^{2}$	1	0.01
$\beta_{\gamma r}{}^{3}$	3	0.002
h _a	5 km	0.5 km
$\beta_{\alpha a}{}^{1}$	$\sqrt{-\ln\left(\alpha_{r,Band1}/20\right)} \times \left(\Gamma_i/\Gamma_1\right) \approx 3$	0.1
$\beta_{\rho\sigma}{}^2$	1	$0.1 \times \sqrt{10}$ (Gain H ⁴), $0.1 \times \sqrt{0.5}$ (Gain M ⁵)
$\beta_{\gamma a^{3}}$	3	$0.1 \times \sqrt{10}$ (Gain H ⁴), $0.1 \times \sqrt{0.5}$ (Gain M ⁵)
$1 \alpha = \exp[-\mu]$	β_{α}^{2} × ScaleFactor _a (ScaleFactor _a : αに関う	トる波数調整パラメータ)

Table 5. 各リトリーバル・パラメータの先験値と偏差

² $\rho = \frac{\rho_{r,Band1}}{\alpha_{r,Band1}} \times \beta_{\rho} \times ScaleFactor_{\rho}$ (ScaleFactor_{\rho}: ρ に関する波数調整パラメータ)

³ $\gamma = \exp\left[-\beta_{\gamma}^{2}\right] \times ScaleFactor_{\gamma}$ (ScaleFactor_y: γ に関する波数調整パラメータ)

⁴Gain H: センサのゲイン設定が"High"の場合

⁵Gain M: センサのゲイン設定が"Middle"の場合

3.3 改良の方法

GOSAT プロジェクトの開始当初、センサ設計にあたり XCO₂の解析精度は 1%を目標と していた。しかし、衛星打ち上げ後、実際に取得されたデータを用いた FP 法による解析精 度の向上の努力により、約 0.1%の精度が達成されてきた。一方、PPDF-S 法は、フォワード 計算での大気層分割の適正化 (Oshchepkov et al., 2011) やヤコビアンの式の改善などの改良 が図られ、その解析精度は他のリトリーバル手法と同様に約 0.1%にまで向上した。そして、 1.3 節で述べたように、地上や航空機によるサンプリング観測の精度である約 0.025 %とい う精度を目指す段階まできている。

本研究では、まず PPDF-S リトリーバル・アルゴリズムに衛星データの解析に一般的に用

いられる方法であるスペクトルのチャンネル選択を取り入れることで、清浄大気での解析 精度を向上させることを試みた。また、現在の PPDF-S 法よりもエアロゾルを含む大気でよ り解析精度の高い解析ができるようになることに加え、解が得られず解析不能となってい たケースでも安定した解が得られることで、より多くの観測データの解析が可能になるこ とを目指し、リトリーバルに用いる解析パラメータの適正化を行った。

3.3.1 チャンネル選択

TIR スペクトルを用いたリトリーバル解析では、観測スペクトルのある波数の、各高度の 状態ベクトルに対する感度は、高度 (*z*) 方向の透過率 (Transmittance: *Tr*) の変化率である *dTr/dz*(荷重関数と呼ぶ) で表すことができる。そして、*dTr/dz*で表される感度は、TIR では Fig. 8 に示すように鉛直方向に一様に分布するように選択することができることが知 られている (Imasu, 1992)。

GOSAT の SWIR 域での観測波長帯では、解析対象である CO₂以外にも H₂O の吸収帯を含 むため、解析に用いるチャンネルから H₂O の吸収の影響を強く受けた波数を除くことで、 CO₂ 濃度解析に影響を及ぼす H₂O 濃度の推定誤差の影響を低減させる。また、複数の波数 が同じ高度に感度をもつことが多いため、各大気層に感度ピークを持つ波長の数を均等に なるようにチャンネルを選択することで、解の安定性を担保するだけでなく計算コストを 削減することが期待される。



Fig. 8. 4.0 µm の CO₂ 吸収帯における荷重関数 (Imasu, 1992)

一方、SWIR における感度の高度分布は、TIR 域での放射の射出による効果の指標である dTr/dz の値では議論できない。これは、TIR では透過率が変化する原因はガス濃度の変化と 温度変化のみであるのに対し、SWIR では加えて光反射/多重散乱の効果が大きいため、ガス の濃度変化の要素のみを抽出する指標とすることが難しいためである。そこで、本研究では GOSAT の観測スペクトルの SWIR 域のうち CO₂の吸収帯である Band 2, 3 に対し、*dTr/dz* に変わる新たな指標の値で鉛直方向の感度を調べ、チャンネル選択を行った。ここでは、

$$dTr(z) = dTr_{down}(z) + \Gamma \cdot dTr_{up}(z)$$
⁽¹³⁾

と定義した。式中の $dTr_{down}(z), dTr_{up}(z), \Gamma$ はそれぞれ、高度 z での下向き放射の透過率、 上向き放射の透過率、地表面反射率である。そして、観測から得られた各高度の情報を平等 に観測結果に反映させるよう、チャンネル選択を行った。

3.3.2 解析パラメータの適正化

XCO₂の精度の向上のために、これまで各種努力が行われてきたことは前述の通りである が、さらなる精度向上のためには、何らかのブレークスルーとなる方法が必要と考える。そ の一つの試みとして、解析結果の CO₂ プロファイルに着目する。これまでの手法の精度評 価においては、XCO₂のみに着目していたが、実際、解析された CO₂ プロファイルを調べる と、非常に不自然な形をしている場合が多く見受けられた。そのため、このプロファイルを 改善することが、XCO₂の解析精度向上に繋がるのではないかと考え、それを評価の指標の 一つとした。

PPDF-S リトリーバルでは、各層での CO₂ 濃度と PPDF パラメータを含む全 39 個のパラ メータが同時に導出されるため、それぞれのパラメータを含む状態ベクトルの x_{gas} と x_{nongas} の解析結果が相補的に影響し合う可能性がある。そのため、CO₂ プロファイルの解析結果を 安定させるためには、 x_{gas} のみならず x_{nongas} を適切に導出しなくてはいけない。しかし、放 射伝達プロセスが複雑である一方、PPDF-S リトリーバルでは限られた数の PPDF パラメー タで多くのタイプの光反射/多重散乱を表現しなければならず、その先験値および背景誤差 の適切な値を決定することは困難である。それぞれの値は、 x_{nongas} に関する先験値ベクトル x_a の各要素である x_a と、その背景誤差の共分散行列 $S_{a,nongas}$ の対角要素の平方根の値であ る σ_a に設定される。もし、実際の x_{nongas} の母集団の広がりよりも必要以上に σ_a を大きく 設定した場合、不適切な値のパラメータを導出する確率が高まり、同時に解析される XCO₂ に悪影響を及ぼす可能性がある。

現在設定されている σ_a よりも適正な値を見つける方法の 1 つは、 σ_a が不必要に大きい パラメータを見つけ、その値を小さく再設定することである。 \mathbf{X}_{nongas} に含まれる各パラメー タは、リトリーバル解析中に σ_a の範囲で変動することで、放射輝度を通して CO₂濃度の解 析値に影響する。そのため、各パラメータがもつ σ_a に対応する輝度スペクトルの大きさは、 その影響力を評価するための良い尺度となり得る。そこで、その尺度として、放射伝達方程 式 $Y = K \cdot x$ に従い $K \cdot \sigma_a$ の値を用いた。そして、対応する $K \cdot \sigma_a$ が不適切に大きなパラ メータを探し、その σ_a を小さくすることで CO₂ 濃度の解析値すなわち CO₂鉛直プロファイ ルの解析結果を安定化させることを試みた。また、 σ_a を小さくすることは x_a への拘束条件 を強めることを意味するため、同時に x_a の適正化も行った。
4 改良の結果

以下、XCO₂ バイアスを、XCO₂ のリトリーバル解析値からシミュレーションで仮定した 値を引いた値と定義し、その値によって改良の有効性を評価した。

4.1 チャンネル選択の結果

全層で感度が一定となるようにすることを目的とし、GOSAT 観測波長帯のうち、CO₂の 吸収帯である Band 2, 3の *dTr/dz*のピークをとる高度が異なる波数を組み合わせてリトリ ーバル解析した。まず、Band 2 (1.6µm 帯) と Band 3 (2.0µm 帯) に含まれる波数をそれぞれ の dTr/dz のプロファイルの形によってタイプ分けし、各タイプ、または、タイプの組み合 わせでの波数を用いて (チャンネル選択して) リトリーバル解析した。

なお、このリトリーバル解析のシミュレーションにおいて、放射輝度スペクトルを求める フォワード計算に用いた大気モデルは、3.2 節で示したような気圧グリッドで 21 層に分け られた大気モデルであり、11 層目付近を境に対流圏 (11 層より下) と成層圏 (11 層より上) に分けられる。Figure 9 は、大気層を定義するための気圧グリッドの番号 (0~21) に対し、 Band 2,3 の *dTr/dz*をタイプごとに色分けしてプロットした図である。ここでは、以下のよ うにタイプ分けを行った;

Band 2

- Type 1: 全層で *dTr/dz* が一定 (灰色線)
- Type 2: 下層の *dTr/dz* が大きい (赤色線)

Band 3

- Type 3: 上層の *dTr/dz* が大きい (青色線)
- Type 4: 下層の dTr/dz が大きい (緑色線)
- Type 5: 全層での *dTr/dz* が一定 (ピンク色線)



Fig. 9. Band2, 3 の各大気層での *dTr/dz*。Band 2 (左) の波数はその形状ごとに Type 1 (灰色 線) または Type 2 (赤色線) に、Band 3 (右) の波数は Type 3 (青色線)、Type 4 (緑色線)、Type 5 (ピンク色線) のいずれかに分類される。

Figure 10 に各タイプ、または、タイプの組み合わせでの波数を用いてリトリーバル解析 した結果を示す。ただし、ここでは Type 4,5の波数は用いなかった。Type 4の波数を用い なかった理由は、Band3で大気下層に感度がある Type4には CO2のみならず H2Oの吸収線 も含むことがわかったからであり、その影響を取り除くためである (このこと自体がチャン ネル選択であるとも言える)。また、Type5の波数を用いなかった理由は、すでに Band2 に 対し全層に感度をもつ Type 2 を選択していることから、Type 5 を選択せず解析に用いる波 数をできるかぎり減らすことで計算コストの削減を図ったためである。 そのため、 Fig. 10 で は、Type 1~3 に対する結果を示している。示した結果は上から順に、選択された波数 (チャ ンネル)の数、アベレージング・カーネル (Averaging Kernel: AK)、CO2 鉛直プロファイル、 情報含有量 (Degree Of Freedom for Signal: DOFS) の解析値、XCO2バイアスである。AK は 各高度の情報がどの高度まで広がって解析されるかを表し、DOFS は鉛直方向に有意に解析 可能な層数を表す指標である。CO2 濃度の先験値と真値は鉛直一様に 385.35 ppm と 387.25 ppmとし、それぞれCO2の鉛直プロファイルの図中にピンク色線とオレンジ色線で示した。 青色線は、解析結果である。また、先験値が真値から大きく離れたときの解析結果も調べる ため、CO2濃度の先験値を鉛直一様に 400 ppm としたときの解析も行った。その解析結果は 黒色線で示してある。なお、AK、DOFS、XCO2バイアスの結果は、CO2濃度の先験値が鉛 直一様に 385.35 ppm であるときの結果である。また、AK の縦軸は Fig. 9 同様、大気層を定 義するための気圧グリッドの番号 (0~21) である。

全チャンネル (Type 1+2+3+4+5) を用いたときの波数の数は 989、DOFS は 1.24、XCO₂バ イアスは-1.05 ppm であった。その結果に対し、Fig. 10 に示されるように、チャンネル選択 後の解析結果は Type ごとに大きく変わることがわかった。まず AK と CO₂鉛直プロファイ ルに着目すると、Type 2 に分類される波数を用いると成層圏での CO₂の感度が多少上がる ものの、全 Type に共通して成層圏での感度が低いことがわかった。次に DOFS に着目する と、Type 1 または Type 3 に分類される波数のみを用いたとき、それぞれの値は 0.69、0.60 であり、鉛直方向に平均した値である XCO₂を表すために必要である 1.0 の値を大幅に下回 った。さらに、CO₂鉛直プロファイルの結果から、成層圏での CO₂濃度は先験値に非常に近 く、その高度に対する感度はほとんどないことがわかった。それぞれに対応する XCO₂バイ アスは-0.01 ppm と-0.20 ppm と低い値だが、これは対流圏での CO₂濃度の増加分と成層圏で の先験値に近い濃度とが打ち消し合い、このような非常に小さな値を示したと考えられる。 また、他の Type またはそれらの組み合わせについては、成層圏での感度は多少上がるもの の、DOFS が 1.0 を下回るだけでなく、XCO₂バイアスが 4 ppm を超える大きな値を示す結 果となった。

以上の結果から、水蒸気の影響低減と処理の高速化のためにはチャンネル選択は有効で あると考えられるが、DOFS を 1 に近い値に保ちつつ CO₂ 鉛直プロファイルの安定化と XCO2 バイアスを低減させるという点では有用ではないため、チャンネル選択は XCO₂ バイ アスの低減にあまり有用ではないと考え、今回の PPDF-S 法の改良の手段には加えなかっ た。

Band2+3	Type1+2+3	434	Detail of the second se	Paral Parameters	0.98	+4.6 ppm
Band3	Type3	47	[Jawa rumbar	Part and the second sec	0.60	-0.20 ppm
	Type1+2	387	Law number 0 0000 0000 0001 0001 0001 Law number 1.1 0001 0001 0001 0001 0001	CuerADT4.00 (Ab. 3-1)	0.92	+4.47 ppm
	Type2	211	Light north the second se	Cuertoficado (Ao 34) De Horidado (Ao 34) De Ho	0.86	+4.21 ppm
Band2	Type1	176	Layer number	Carry Contracts (Ma 39)	0.69	-0.01 ppm
		波数の数	AK	CO ₂ profile	DOFS	Bias

Fig. 10. 各タイプ、または、タイプの組み合わせでの波数を用いてリトリーバル解析した結果

4.2 解析パラメータの適正化の結果

4.2.1 σ_aを適正化するパラメータの決定

各 PPDF パラメータの $K \cdot \sigma_o$ の値を比較し、放射輝度を通して CO₂濃度の解析値に及ぼ す影響の大きさを評価した。その結果、エアロゾルによる光反射の効果を表す α_o の $K \cdot \sigma_o$ の値が他のパラメータに対して 2 桁以上のオーダーで大きいことがわかった。ここでは例 として Band 2 における α_o ρ_o γ_o の $K \cdot \sigma_o$ のスペクトルを Fig. 11 に示す。このことか ら、解析における α_o の変動が必要以上に大きいために CO₂鉛直プロファイルの不安定性を 引き起こしていた可能性があると考え、 α_o の σ_o とその初期値を適正化することを試みた。



Fig. 11. Band 2 における α_{α} , ρ_{α} , γ_{α} の $K \cdot \sigma_{\alpha}$ のスペクトル

4.2.2 清浄大気への適用

α_oに関する σ_oの値を、元の値に対し、1 から 1/100 までの倍率を掛けた値に変えて、リ トリーバル解析した。解析に用いた輝度スペクトルは、大気放射伝達モデル Pstar3 で以下の 地表面反射率と大気を仮定してシミュレーションした観測スペクトルである。

- 地表面反射率: 波長依存性が無いとし GOSAT の観測波長帯 Band 1~3 で共通して 0.2
- 大気:清浄大気および 0.55 µmでの AOT の値が 0.8 の 4 種のエアロゾル (Dust-like, Urban, Rural, Soot) を含む大気

シミュレーションで 0.05 から 0.5 の範囲の地表面反射率と、0.05 から 1.0 の範囲の AOT の組み合わせによる様々な観測条件に対し、CO₂鉛直プロファイルの形と XCO₂の解析値を 参照し、様々な σ_a についてのリトリーバル解析結果の中から σ_a の適正値を決めた。その 結果、先験値 α_a を元の値から 1/10 倍にした上で、 σ_a を元の値の 1/20 倍にすることが、CO₂ 鉛直プロファイルを安定化させ、XCO₂バイアスを低減させることに有用であることがわか った。この節では清浄大気における結果のみを示し、エアロゾル大気についての結果は 4.2.3 節で述べる

Figure 12~14 はそれぞれ、 α_a に関する σ_a を適正化する改良を施した後の PPDF-S 法で、 清浄大気についてリトリーバル解析したときの、CO₂鉛直プロファイル、AK、そして XCO₂ に与える各高度の寄与率を表す Column Averaging Kernel (CAK)の結果である。CAK は、気 柱量に対する感度の高度分布を表す指標である。これらの解析結果は改良前後でほぼ不変 であったため、ここでは改良後の結果のみを示す。Figure 12 に図示されるピンク色線と灰 色線はそれぞれ、鉛直一様に与えた 385 ppm の先験値と 400 ppm の真値を表す。また、赤 色線は *SNR* = 400 のときの結果であり、それとあわせ、比較のため、*SNR*が理想的に非常 に高い場合としてその値が 2400 のときの結果も青色線で示した。一方、Fig. 13, 14 は *SNR* = 400 のときの結果である。

Figure 12 より、*SNR* = 400 のときの CO₂プロファイルは、先験値と真値のプロファイル との間に存在するが、その形は Fig. 14, 15 でも示されているように、対流圏の中層にピーク を持ち、鉛直方向に一様ではないことがわかる。また、*SNR* = 2400 のとき、観測誤差は非 常に小さいため、解析結果は観測の情報を重んじて真値のプロファイルに近づくが、依然と して完全には鉛直方向に均一ではない。この結果については第6章で議論する。

これら CO₂鉛直プロファイル、AK、CAK と同様の条件での解析結果に対応する XCO₂の バイアスは、改良前後でそれぞれ-0.47 ppm と-0.63 ppm であった。このように、XCO₂の解 析精度は清浄大気においては多少悪化するものの、実際の大気中で起こる各種現象に起因 する CO₂濃度の変動と比較すると十分小さい値である。



Fig. 12. 改良後の PPDF-S 法で清浄大気についてリトリーバル解析したときの、CO₂鉛直プ ロファイル。赤色線と青色線はそれぞれ *SNR*=400,2400 のときの結果である。CO₂濃度の 先験値と真値は、鉛直一様にそれぞれ 385 ppm (ピンク色線) と 390 ppm (灰色線) とした。



Fig. 13. 改良後の PPDF-S 法で清浄大気についてリトリーバル解析したときの AK (*SNR* = 400)



Fig. 14. 改良後の PPDF-S 法で清浄大気についてリトリーバル解析したときの CAK (*SNR* = 400)

4.2.3 エアロゾルを含む大気への適用

Figure 15 は、シミュレーションで大気中に Dust-like, Urban, Rural, Soot の 4 種のエアロゾ ルがそれぞれ存在すると仮定し、各エアロゾル種の AOT (波長 0.55 µm での値)を 1.0、地 表面反射率を 0.2 としたときの CO₂鉛直プロファイルの解析結果である。上図が改良前、下 図が改良後の結果を表す。それぞれ赤色線で Rural、青色線で Urban、水色線で Soot、黒色 線で Dust-like の結果を、また Fig. 12 同様、先験値と真値のプロファイルをそれぞれピンク 色線と灰色線で示す。なお、AK と CAK の解析結果は清浄大気に対する結果とほぼ同等で あったため、ここでは示していない。Figure 15 の上図には Urban の結果が図示されていな いが、これは、改良前の PPDF-S 法では、Urban を含む大気に対しては Gauss-Newton 法に基 づく反復計算において収束する x の解が見つからなかったためである。一方、改良後では、 全てのエアロゾルに対して解が得られた。また、特に Dust-like については、改良後は対流 圏における CO₂濃度の変動が小さくなり、CO₂鉛直プロファイルが安定化した。

また、Fig. 15 の鉛直プロファイルに対応する XCO₂ のバイアスを Table 6 に示す。Rural, Urban, Dust-like については PPDF-S 法の改良後に XCO₂ のバイアスが低減したことがわかっ た。しかし、Soot については負の方向にバイアスが増加した。この結果については第6章で 議論する。



Fig. 15. シミュレーションで地表面反射率を 0.2、AOT を 1.0 と仮定したときの、CO₂ 鉛直 プロファイルの解析結果 (上図: 改良前の PPDF-S 法による結果、下図: 改良後の PPDF-S 法 による結果)。赤色線で Rural、青色線で Urban、水色線で Soot、黒色線で Dust-like の結果を、 また、先験値と真値のプロファイルをそれぞれピンク色線と灰色線で示す。

	改良前	改良後
Rural	1.31 ppm	0.48 ppm
Urban	解なし	-1.27 ppm
Soot	-0.95 ppm	-2.03 ppm
Dust-like	11.38 ppm	-1.22 ppm

Table 6. Fig. 15 の鉛直プロファイルに対応する XCO₂のバイアス

さらに、Table 3 に示すように、地表面反射率を 0.05~0.50、エアロゾルを Dust-like, Urban, Rural, Soot の 4 種、各エアロゾル種に対して AOT (波長 0.55 µm での値)を 0.05~1.0 と仮定し た条件に対してリトリーバル解析した。地表面反射率と AOT の大きさはどちらも 0.05 刻み で変化させ、試したシミュレーションの数は全部で 800 (= 10×4×20) となる。Figure 16 は、 それらの地表面反射率と AOT 対し、計算された XCO₂ バイアス (単位は ppm) の等高線図 である。バイアスが地表面反射率、エアロゾル種、AOT に依存することが分かる。特に地 表面反射率が小さい場合、全てのエアロゾル種で XCO₂ バイアスが大きな負の値を示し、バ イアスの AOT への依存性が大きい。また、Rural, Urban, Dust-like に対してはバイアスが 0 となる線があるのに対し、Soot については全ケースで負のバイアスが見られた。Dust-like に ついては、バイアスは±5 ppm を超えるケースもあり、他のエアロゾル種の結果よりも相対 的にバイアスが大きかった。また、Rural, Urban, Dust-like に対して見られたバイアスが 0 と なる線は、地表面反射率が 0.2 から 0.3 のときに現れた。ここでは、先験値 α_o を元の値から 1/10 倍、 σ_o を元の値の 1/20 倍にしたときの結果を示しているが、その他の値を設定した場 合にも、バイアスが 0 となるのは、地表面反射率が 0.2 から 0.4 の範囲の値を取るときであ った。



Fig. 16. 様々な地表面反射率と AOT の条件に対して計算された XCO₂ バイアス (単位は ppm) の等高線図

さらに、実際の GOSAT の観測に近いシミュレーションにより XCO₂の解析精度を評価す るため、模擬計算される観測スペクトルのシミュレーションに、波数依存性を考慮した、よ り現実的な地表面反射率を与えた。与えた反射率は、Advanced Spaceborne Thermal Emission and Reflection Radiometer (ASTER) のスペクトル・ライブラリに基づいて設定された 19 分類 の土地被覆タイプ (0: water, 1: evergreen needleleaf forest, 2: evergreen broadleaf forest, 3: deciduous needleleaf forest, 4: deciduous broadleaf forest, 5: mixed forest, 6: closed shrublands, 7: open shrublands, 8: woody savannas, 9: savannas, 10: grasslands, 11: permanent wetlands, 12: croplands, 13: urban and built-up areas, 14: cropland/natural, 15: snow and ice, 16: barren or sparsely vegetated areas, 17: water bodies, and 18: tundra) の値である。Figure 17 は、土地被覆タイプご との XCO₂バイアスの結果である。この結果からも、Fig. 16 で示された結果と同様、water または snow and ice のような小さな値の地表面反射率に対してバイアスが大きな負の値を取 ることがわかる。また、Dust-like のバイアスが他のエアロゾル種と比べて絶対値が大きいこ とも示された。この結果については、第6章で議論する。

また、シミュレーションで仮定するエアロゾル種によって、フォワード計算とリトリーバ ルを繰り返す計算の反復回数ごとに XCO₂解析値が変動する様子が異なることがわかった。 例として、Fig. 18 に Dust-like を仮定したときの結果を示す。ここで示すように、XCO₂解析 値は、第一推定値 (385.75 ppm) からスタートし、1 回目の計算で真値 (387.5 ppm) に最も 近づいた後、2 回目に真値から離れる値を取り、3 回目以降はほぼ変化しないという特徴的 な変動を示す傾向がある。本来であれば、解析値は反復回数を重ねるごとに真値へ近づくは ずである。しかし、1 回目の計算で解析値が真値に最も近い結果が得られ、その後、再度真 値から離れるという挙動を示すということは、状態ベクトル ×等の初期値が、Dust-like を含 む大気に対しては適切ではない可能性を表している。このような示唆があるものの、今後、 反復回数ごとの XCO₂解析値の変動の様子によって、大気中のエアロゾル種を判別すること のできる可能性について、今後、詳細に検討していくべきと考える。そして、一旦、その変 動の様子からエアロゾル種が Dust-like と判別されれば、1 回目の計算値をリトリーバル結 果として採用することで、より適した解を得ることができるといえる。このよう方法が、エ アロゾル種が判別した後のアルゴリズムの改良点として考えられる。



Fig. 17. 土地被覆タイプ(0: water, 1: evergreen needleleaf forest, 2: evergreen broadleaf forest, 3: deciduous needleleaf forest, 4: deciduous broadleaf forest, 5: mixed forest, 6: closed shrublands, 7: open shrublands, 8: woody savannas, 9: savannas, 10: grasslands, 11: permanent wetlands, 12: croplands, 13: urban and built-up areas, 14: cropland/natural, 15: snow and ice, 16: barren or sparsely vegetated areas, 17: water bodies, and 18: tundra) ごとの XCO₂バイアス



Fig. 18. シミュレーションでエアロゾル種として Dust-like を仮定したとき、反復回数ごとに XCO₂解析値が変動する様子

5 GOSAT データ解析への応用

この章では、 α_o の分散である σ_o および初期値を適正化した PPDF-S 法を、GOSAT の実 データ解析へ応用した結果を述べる。まず、清浄大気における解析精度を調べた後に、高濃 度エアロゾル域である西シベリア域に改良後の PPDF-S 法を適用した。解析した GOSAT の 観測データは、2009 年 6 月から 2014 年 5 月にかけて観測された、V161.160 の L1B 相当の 輝度データである。

なお、GOSAT データ解析では、ガス吸収係数の計算を LBLRTM の代わりに、ACOS/OCO-2 グループから提供されている吸収係数 (ABSorption Coefficient: ABSCO) のルックアップ テーブル (Look Up Table: LUT) (v3.0) を利用した。これらの LUT は、波長、温度および気 圧の関数として表される三次元のパラメータの関数として表される吸収断面積を O₂, H₂O および CO₂に対して用意しており、non-Voigt line shapes, speed dependence, line mixing また、 分子同士の衝突によって誘発される吸収などの様々な放射の効果を考慮している。さらに 本解析では、オリジナルの PPDF-S リトリーバル・アルゴリズムに対し、リトリーバル解析 内で用いる装置関数と、GOSAT の観測スペクトルの電気信号から放射輝度へ単位換算する ための変換係数を、L1B データ V161.160 に対応するバージョンのデータセットに更新した。 装置関数は、0.01 cm⁻¹ の波数分解能でフォワード計算された輝度スペクトルを畳み込み積 分し、0.2 cm⁻¹刻みの GOSAT の観測スペクトルに合わせるために用いられた。

5.1 清浄大気

清浄大気への適用として、TCCON の 11 サイトと、西シベリア域に位置する Yekaterinburg (57.038°N, 59.545°E) の近辺で得られた GOSAT データについてリトリーバル解析を行い、 それらの結果をそれぞれ TCCON と Yekaterinburg での地上観測から得られた XCO_2 データ と比較して検証した。

5.1.1 TCCON データによる検証結果

用いた TCCON データは、Iwasaki et al. (2017) と同様、Table 3 に示した TCCON の 11 サ イトから得られた XCO₂ データである。GOSAT データと TCCON データの同期条件は、緯 度・経度差が 2°以内、観測時間差が 30 分以内とした。

XCO₂ バイアスを、GOSAT データからの解析結果から TCCON データを引いた値と定義 し、その値によって解析精度を評価した。その結果、改良前の PPDF-S 法での解析結果は、 XCO₂ バイアスとその標準偏差がそれぞれ 0.37 ppm と 3.04 ppm (データ数は 2537) であった のに対し、改良後は-0.39 ppm と 3.56 ppm (データ数は 2587) となり、バイアスが負の方向 へややシフトし標準偏差が増加した。しかし、解析精度は大きく劣化することはなかった。 Table 6 に改良後の PPDF-S 法による XCO₂の解析結果について、TCCON サイトごとの検証 結果を示す。

	改良前			改良後			
TCCON サイト	データ数	XCO2 バイアス [ppm]	標準偏差 [ppm]	データ数	XCO ₂ バイアス [ppm]	標準偏差 [ppm]	
Bialystok	61	0.38	2.65	65	-0.70	2.90	
Bremen	32	1.53	2.61	32	0.89	3.14	
Garmisch	106	0.69	2.65	109	-0.24	2.91	
Orléans	176	0.12	2.00	178	-0.75	2.30	
Lamont	770	0.49	2.82	782	0.31	2.88	
Park Falls	192	-0.02	2.88	198	-1.24	3.29	
Sodankyla	48	0.87	2.32	48	0.04	2.54	
Tsukuba	340	2.55	3.14	344	1.83	3.52	
Darwin	303	-0.77	2.46	313	-2.10	3.88	
Laudar	128	-1.47	1.96	131	-2.21	2.40	
Wollongong	381	-0.24	2.45	387	-1.33	2.93	
Total	2537	0.37	3.04	2587	-0.39	3.56	

Table 6. PPDF-S 法に改良を施した後の、TCCON サイトごとの検証結果

5.1.2 Yekaterinburg でのデータによる検証結果

Yekaterinburg は TCCON には属していないが、地上設置型の類似のフーリエ分光器による 観測により XCO₂を解析しており、その解析精度は TCCON とほぼ同等であることが報告さ れている (Rokotyan et al., 2015)。Yekaterinburg は 5.2 節で示す対象地域内に位置しており、 そこで得られた XCO₂データは対象地域に対する検証データとして位置づけられる。データ はこのサイトを運用している国立ウラル大学より提供を受けた。

ここでは、GOSAT データからの解析結果との比較条件は、緯度・経度差が 2°以内、観測 時間差が 90 分以内とした。Figure 19 は GOSAT データの解析結果と、Yekaterinburg でのデ ータとの相関図である。この結果に対し、TCCON データでの検証と同様に、XCO₂ バイア スを、GOSAT データからの解析結果から地上観測のデータを引いた値として定義する。そ の結果、XCO₂ バイアスとその標準偏差の改良前と後の値は、それぞれ 0.75 ppm と 0.57 ppm (データ数は 5)、0.69 ppm と 1.79 ppm (データ数は 7) であり、TCCON データでの検証結果 と同じく、改良後の精度が大きく劣化することはなかった。



Fig. 19. GOSAT データの解析結果と Yekaterinburg での地上観測データとの相関図

5.2 エアロゾルを含む大気

5.2.1 西シベリア域のバイオマス・バーニング発生地域

この節では、本研究の目的である、エアロゾル高濃度域における GOSAT データ解析への 適用の結果を示す。ここでは、エアロゾルが高濃度となる原因の現象として、バイオマス・ バーニングに着目した。バイオマス・バーニングは、森林、草原、および穀物残渣などが燃 焼することを指す一般的な用語であり、温室効果ガスとともに、ブラック・カーボンおよび 有機炭素のエアロゾルを大気中に放出することが知られている。

西シベリア域は、最大のバイオマス燃焼地域の一つである。この地域の南部では、農作業 の一環として春小麦の残渣の燃焼がなされるが、その野焼きがうまく管理されていないと きはさらに森林火災が引き起こされる可能性がある。そこで、本研究での対象地域は、西シ ベリア域の緯度 45°N -65°N、経度 30°E-75°E の地域とした。この地域での土地被覆タイプを The International Geosphere-Biosphere Programme (IGBP)の定義する 19 種の土地被覆分類に 基づいて調べたところ、主要なタイプは北方針葉樹林と耕作地であった (Fig. 20)。また、こ の領域は地上で CO₂とエアロゾルを測定する Yekaterinburg の観測サイトも含んでいる。

解析期間は、2013 年 6~8 月とした。この時期には、バイオマス・バーニングと同定され 多数の火災件数と、そこから放出された煙のプルームが MODerate resolution Imaging Spectroradiometer (MODIS) によって検出された。この領域におけるバイオマス・バーニング の活性度の尺度として、MODIS によって検出された Thermal anomalyの累積数を Fig. 21 に 示す。さらに、Yekaterinburg は地上から sun spectral photometer を用いてエアロゾルを測定す るネットワークの Aerosol Robotic NETwork (AERONET) に属するが、この時期に Yekaterinburg でも高い AOT が観測されたことが確認されている (Fig. 22)。



Fig. 20. 本研究での対象地域 (緯度 45°N -65°N、経度 30°E-75°E) の主要な土地被覆タイプ と、Yekaterinburg の観測サイトの位置



Fig. 21. MODIS によって検出された Thermal anomaly の累積数。解析期間は 2013 年 6~8 月。



Fig. 22. Yekaterinburg で観測された AOT。AERONET の観測から得られた AOT の全データ を灰色点で示し、そのうち、AERONET の観測時間の 30 分以内に地上に設定された FTS で CO₂の観測がなされ XCO₂ データが解析されたときの AOT を赤色点で示す。

5.2.2 XCO2 解析結果

対象地域・期間に対し、改良前の PPDF-S 法で解析された XCO₂ データの数は、FP 法で解 析された RA プロダクトの数よりも少なかった。しかし、改良後の PPDF-S 法で解析された データの数は、改良前の元の数より大幅に増加した。対象地域・期間での観測された GOSAT データのうち、雲スクリーニングを通過して解析対象となるデータ数は約 1700 であるのに 対し、改良前に解析できた数は約 700 だった。一方、改良後の解析数は約 1200 であり、デ ータ数が約 70 %増加した。Figure 23 は、新たに導出された XCO₂の分布である。なお、基 本的に衛星による観測点が固定されているため、多くの観測点が重なっている。これらの結 果の中には、バイオマス燃焼による煙の存在する条件下でも、改良後の手法で XCO₂を導出 できた例があることもわかった。その例として 2013 年 8 月 10 日の観測シーンを Fig. 24 に 示す。背景は MODIS /AQUA による可視合成画像である。

改良後の PPDF-S 法で導出された XCO₂ と RA プロダクトとを比較した結果が Fig. 25 で ある。その結果、これらのデータは概ね良い相関をもつが、改良後 PPDF-S 法で導出された データの約 10 %は 370~380 ppm の低い XCO₂を示すことがわかった。このような低い値を 取ることについては 6 章で議論する。



Fig. 23. 改良後の PPDF-S 法で新たに導出された XCO₂の分布。衛星による観測点が固定されているため、多くの観測点が重なっている。解析されたデータの数は約 1200 個。



Fig. 24. バイオマス・バーニングの煙の存在する条件下で XCO₂(オレンジ色と黄色の大きな 点) が解析された例 (観測日: 2013 年 8 月 10 日)。背景は米国の衛星搭載センサ MODIS/AQUA による可視合成画像。赤い小さな点は MODIS/AQUA・TERRA で検知された ホット・スポット。



Fig. 25. 改良後の PPDF-S 法で導出された XCO₂ と RA プロダクトとの関係

5.2.3 PPDF パラメータ解析結果

Figure 26 は、XCO₂ と同時に新たに導出された、エアロゾルに関する PPDF パラメータの α_{o} (左上)、 ρ_{o} (右上) および α_{o}/ρ_{o} (左下)の空間分布である。 α_{o}/ρ_{o} は、光の反射によって光路長が短くなる効果(α_{o})と光の散乱に起因して光路長が長くなる効果(ρ_{o})の比を表す指標とすることができる。また、Fig. 27 は GOSAT の観測波長帯の Band 2, 3 での平均地表面反射率の空間分布である。この図から、Band 2, 3 での平均地表面反射率が 55°N よりも高緯度の領域で 0.1 以下の低い値を取るのに対応して、 α_{o} と α_{o}/ρ_{o} は同じ領域で高い値を示すことから、これらパラメータの地表面反射率への依存性が高いことが分かる。



Fig. 26. PPDF-S 法改良後に新たに XCO₂ と同時に導出された、エアロゾルに関する PPDF パ ラメータである α_o (左上)、 ρ_o (右上) および α_o / ρ_o (左下)の空間分布



Fig. 27. Band 2, 3 での平均地表面反射率の空間分布

5.2.4 PPDF パラメータによって表されるエアロゾルの光学的特性

各種エアロゾルは、それぞれの屈折率および粒径分布に対応する光反射/散乱の特性を有 する。一方、地表面反射率およびその波長依存性は、土地被覆ごとに異なる。さらに、5.2.3 節で示したように、 $\alpha_o \ge \alpha_o / \rho_o$ の地表面反射率への依存性は高い。そのため、 $\alpha_o \ge \alpha_o / \rho_o$ の値によって、エアロゾル種ごとの光学特性に関係性がないかを調査した。ここでは、 大気放射伝達モデル Pstar3 を用いて、エアロゾル種と土地被覆を変えて GOSAT の観測スペ クトルをシミュレーションし、そのスペクトルに対してリトリーバル解析を施した結果、導 出された $\alpha_o \ge \alpha_o / \rho_o$ の値を調べた。仮定したエアロゾルは 0.55 μ m における AOT の値が 0.5 の Soot, Rural, Urban, Dust-like の 4 種であり、それぞれのエアロゾルを個別に Pstar3 に代 入した。エアロゾルは、高度 0~2km まで一様な混合比で存在すると仮定している。また、 土地被覆は 4.2.3 節と同様、IGBP 定義に基づく 19 種の土地被覆分類を仮定した。

Figure 28 はシミュレーション解析で導出された $\alpha_a \ge \alpha_a / \rho_a$ の相関図のチャート (以降、 $\alpha_a - \alpha_a / \rho_a$ チャートと呼ぶ) である。Soot, Rural, Urban, Dust-like の結果をそれぞれ赤色点、 青色点、緑色点、黒色点で示しており、各点に隣接する数字は土地被覆の種類を表す。また、 比較のため、Soot についてのみ、波数依存性のない地表面反射率を 0.05 から 0.5 まで変化 させ、かつ、0.55 μ m での AOT を 0.05 から 1.0 まで変化させたときの結果を灰色点で示す。 横軸と縦軸の範囲は、次に Fig. 29 で示す GOSAT のデータ解析から得られた結果に合わせ て制限した範囲を設定している。その結果、土地被覆タイプが water, water bodies, snow and ice および tundra である場合、 $\alpha_a \ge \alpha_a / \rho_a$ が大きすぎるため、軸の範囲を超え、Fig. 28 に は示されていない。なお、エアロゾルに関する PPDF パラメータの AOT への依存性につい ては第 6 章で議論する。

上記のシミュレーションに対し、GOSATのデータ解析から得られた $\alpha_o - \alpha_o / \rho_o free + \alpha_o / \rho_o / \rho_o / \rho_o free + \alpha_o / \rho_o / \rho_o / \rho$



Fig. 28. 様々な土地被覆を仮定したシミュレーション解析から得られた α_a と α_a/ρ_a の相関 図のチャート ($\alpha_a - \alpha_a/\rho_a$ チャート)。赤色点: Soot、青色点: Rural、緑色点: Urban, 黒色点: Dust-like。各点に隣接する数字は土地被覆の種類を表す (0: water, 1: evergreen needleleaf forest, 2: evergreen broadleaf forest, 3: deciduous needleleaf forest, 4: deciduous broadleaf forest, 5: mixed forest, 6: closed shrublands, 7: open shrublands, 8: woody savannas, 9: savannas, 10: grasslands, 11: permanent wetlands, 12: croplands, 13: urban and built-up areas, 14: cropland/natural, 15: snow and ice, 16: barren or sparsely vegetated areas, 17: water bodies, and 18: tundra)。灰色点は、波数依存 性のない地表面反射率を 0.05 から 0.5 まで、 0.55μ m での AOT を 0.05 から 1.0 まで変化さ せたときの Soot についての結果。



Fig. 29. GOSAT のデータ解析から得られた $\alpha_{a} - \alpha_{a} / \rho_{a}$ **チャート**。カラー・バーの色は、導出された XCO₂の値を表す。

6 議論

4.2.1 節で示したシミュレーション解析の結果、清浄大気に対して *SNR* = 2400 と仮想的 に観測誤差を非常に小さく設定した場合でも、完全には鉛直方向に均一な真値のプロファ イルとは一致しなかった。これは、Pstar3 に基づく Discrete Ordinate Method (DOM) という 光の多重散乱の計算と、PPDF-S 法で PPDF パラメータを用いたフォワード計算の間で放射 伝達計算が異なるためであると考えられる。清浄大気での光路長変動の主な要因はレイリ ー光散乱であるため、これら2つのモデル間で Band 1 におけるレイリー散乱の効果を含む 透過率の差を調べると、O₂の吸収線上で最大約0.25 %の差があることがわかった (Fig. 30)。 なお、この結果は、地表面反射率は波長依存性が無いとし全波数で 0.2 としたときのシミュ レーション解析に基づいている。

PPDF-S 法で導出された Band 1 の透過率が DOM での値と異なることが、PPDF-S 法での CO₂濃度の解析値にどのように影響し得るかを考える。いくつかのリトリーバル・アルゴリ ズムでは O₂吸収帯である Band 1 から XO₂ (酸素の気柱平均濃度) および地表気圧をリトリ ーバルするが、PPDF-S 法は地表気圧を導出せず、気象データに基づく初期値を解析に用い る。そのため、PPDF-S 法において Band 1 の透過率が DOM での値と異なったとしても、地 表気圧を通して CO₂ 濃度の解析値 (Band 2, 3 を使用) に影響を与えることはない。一方、 Table 5 の注釈 2 の式に示すように、Band 1 から導出されたレイリー散乱の PPDF バラメー $タ \alpha_r \ge \rho_r$ は、Band 2, 3 でのエアロゾルによる散乱の ρ_a の初期値を決める式に用いられて いる。そのため、 ρ_a の初期値を通して CO₂濃度の解析値に影響を与える可能性がある。そ の影響の大きさについては、今後、定量的に議論・検討したいと考えるが、 ρ_a の初期値を 通しての影響は小さいと考えている。



Fig. 30. Pstar3 と PPDF-S 法による計算の間での、Band 1 におけるレイリー散乱の効果を含む透過率の差。地表面反射率は波長依存性が無いとし全波数で 0.2 とした。

シミュレーション解析において、エアロゾルを含む大気については、Dust-like を含む大気 に対する XCO₂ バイアスが、他のエアロゾル種 (Urban, Rural, Soot) の結果に比べて非常に 大きいことがわかった。これは、4 種のエアロゾルの複素屈折率の実部 (屈折率の大きさを 表す) の大きさはほぼ同等だが、Dust-like の粒径が SWIR の波長 (1.0 μm のオーダー) とほ ぼ同じオーダーの大きさであることから、Dust-like は効率よく SWIR 域の光を反射させる ためと考えられる。Figure 31 は Band 1~3 での AOT のスペクトルであり、全バンドにおい て Dust-like の AOT の値が最大で、他のエアロゾル種の AOT に対し 4 倍以上大きいことが わかる。



Fig. 31. Band 1~3 での AOT のスペクトル。黒色線は Dust-like、赤色線は Urban、青色線は Rural、水色線は Soot の AOT を表す。

次に、大気中に Soot が含まれる場合、シミュレーション解析において XCO₂ バイアスは 常に負の値を示し、XCO₂ は過小評価されたことについて考察する。観測されるスペクトル に現れる CO₂ の吸収線の深さは、光源から観測点までの光路長と、その間に存在する CO₂ の濃度の掛け合わせによって決まる。そのため、光路長が短く (長く) なった効果を適切に 推定できなかった場合、CO₂ 濃度は過小 (過大) 評価されることがわかった。上記の考えに 基づくと、Soot が大気中に含まれるときに XCO₂ が過小評価される原因は、PPDF パラメー タを用いたフォワード計算において、光路長が短くなった効果を適切に推定できていない ためと推測される。

以下、この推測が正しいかを、Soot の光学特性をもとに考察する。Figure 32 は複素屈折 率の波長依存性の図であるが、Rural は 70%の Water-Soluble と 30%の Dust-like、また Urban は 20 %の Soot と 80 %の Rural で構成されるため、ここでは Water-Soluble, Dust-like, Soot の 複素屈折率を示す。この図から、一般に光の吸収性を表す複素屈折率の虚部について、Soot の値が他のエアロゾル種よりも2桁程度大きいことがわかる。このことが、光散乱や吸収特 性に及ぼす影響を考える。Figure 33 は複素屈折率の虚部 *m*; をパラメータとした、サイズ パラメータ $x(x=2\pi n \lambda; ccc\pi は円周率、r は粒子の半径、 \lambda は光の波長である。x は$ 光の波長に対する粒子の相対的な大きさを意味する)と散乱効率因子 (Q_{sca}) との関係を示 す図である。典型的な値として、例えば Soot の *m*_iが 0.5、*r*が約 1.0 μm とすると、波長 1.6 μm の光における x の値は約 1.0 であり、同じ粒径で miが Soot よりも 2 桁オーダーで小さ い他種のエアロゾルに比べ、Qscqが数桁大きいことが分かる。そのため、Soot は光の吸収性 が強いだけでなく、同じ粒径の他種のエアロゾルよりも、波長 1.6 µm の光の散乱に効果的 に働くことがわかる (柴田,1999)。このことから、大気中に Soot が含まれるとき、以下の現 象が生じることが考えられる; (1) 波数 1.6 μm 付近の光に対し Soot の光散乱性が大きいこ とから、エアロゾル層上端で反射される効果と、エアロゾル層で多重散乱される効果が増大 する、(2) 波数 1.6 μm 付近の光に対し Soot の光吸収性が大きいことから、エアロゾル層で 多重散乱された光は効果的に吸収される。これら2つの現象により、全層を通しての平均光 路長は短くなると考えられ、そのとき、エアロゾル層上端での反射率を表す*α*。の値は大き くなり、エアロゾル層で多重散乱された光の光路長を表す ρ_αの値は小さくなると推測され る。

大気中の Soot が平均光路長を短くする効果をもつことを、大気透過率変化に関するシミ ュレーションにより調査した。エアロゾルを含む大気と清浄大気での波長 1.6 µm 帯での大 気透過率の比 (*Tr_{ratio}* = *Tr_{aeorosol}* / *Tr_{clear}* ここで *Tr_{aeorosol}* と *Tr_{clear}* はそれぞれエアロゾルを 含む大気および清浄大気での大気透過率)を計算する。この値は、CO₂ 吸収線上と CO₂ 吸収 線から外れたベースライン上での値の違いなどの特徴を見ることで、エアロゾルによる光 路長の変化を表す指標とすることができる。例えば、ベースラインよりも CO₂ 吸収線上で Tr_{ratio}の値が小さくなれば、エアロゾルの多重散乱の影響により光路長が長くなり、光が CO₂ によって効果的に吸収されたことを表す。逆に、CO₂ 吸収線上で *Tr_{ratio}*の値が大きくなった 場合は、エアロゾルの散乱の影響によって光路長が短くなったことを表す。そこで、Rural, Urban, Soot, Dust-like を含む大気での Tr_{ratio} を調べたところ、Rural, Urban, Dust-like はベー スラインよりも CO₂吸収線上で Tr_{ratio} の値が小さくなるのに対し、Soot は CO₂吸収線上で 値が大きいことがわかった。例として、0.55 µm での AOT が 0.5、地表面反射率が波数に関 係なく 0.2 であるときの Tr_{ratio} を Fig. 34 に示す。この結果より、前者 3 種のエアロゾル種 が 1.6 µm 帯での光路長を長くするよう働くのに対し、Soot は光路長を短くする効果をもつ ことがわかる。このことは、複素屈折率の虚部の大きさと、光路長との関係に関する上記説 明が正しいことを示している。

Figure. 4 の α , ρ の概念図で示したように、 α_o はエアロゾル層上端で反射されることで 光路長が短くなる効果を表す。そこで、光路長が短くなる効果を大きく推定するよう、 α_o の初期値を大きく再設定することで、XCO₂の過小評価を解消させることを試みた。 α_o の

初期値は、Table 5 で示したように $\sqrt{-ln(\alpha_{r,Band1}/20)} \times (\Gamma_i/\Gamma_1)$ の式によって決められるが、

Figure 35 の横軸は、上式の"1/20"の値に代わる値、縦軸はバイアスの値である。この結果が 示すように、 α_o の初期値を変えることで、バイアスを0に近づけることが可能であること がわかる。このシミュレーションの結果から、バイアスを低減させるのに α_o の初期値を決 める式に 0.18 の値を用いることが最も有効であった。このように、いったんエアロゾル種 が Soot と識別できれば、 α_o の初期値を 0.18 倍にすることで、XCO₂バイアスの低減を図る ことができることがわかった。



Fig. 32. Water-Soluble, Dust-like, Soot の複素屈折率。赤色線は実部 、青色線は虚部 を示す。 左縦軸は実部、右縦軸は虚部の軸である。



Fig. 33. 複素屈折率の虚部 (*m*) ごとのサイズパラメータ (*x*) と散乱効率因子 (*Q_{sco}*) との 関係



Fig. 34. Rural, Urban, Soot, Dust-like を含む大気での *Tr_{ratio}*の例。0.55 µm での AOT が 0.5、 地表面反射率が波数に関係なく 0.2 であると仮定したときのシミュレーション結果。



Fig. 35. α_o の初期値と Soot に対しての XCO₂バイアスの関係。横軸は α_o の初期値を決める 式、 $\sqrt{-ln(\alpha_{r,Band1}/20)} \times (\Gamma_i/\Gamma_1)$ に用いる値。

さらに、PPDF-S 法でのエアロゾルの光吸収項の表現に関して、もう1 点見直すべき点は、 地表面反射率と、解析変数の一つである各種光特性の波長依存性を表現するパラメータ(ポ リノミアル)の推定方法である。ポリノミアルについては後述する。現在、地表面反射率は GOSAT の観測バンド内では一律な値が推定されている。GOSAT の観測バンド i(i=1,2,3)での反射率を Γ_{h} バンド iに含まれる波数の数を n_{h} バンド iに含まれる k番目の波数を ν_{h} ν_{h} での地表面反射率を $\Gamma_{\nu k}$ とすると、 Γ_{i} は以下の式によって表される。

$$\Gamma_i = \frac{\sum_{k=1}^{n_i} \Gamma_{\nu_k}}{n_i} \tag{32}$$

ガスによる光吸収と空気分子によるレイリー散乱を考慮して計算された輝度

PPDF-S パラメータを用いたフォワード計算では、バンド *i*の放射輝度を求めるとき、 Γ_i が用いられる。しかし、 Γ_i は、バンド *i*で値が一定であるため、地表面反射率の、 バンド *i*の内での波長依存性を表現できていない。さらに、大気中にエアロゾルがあっ た場合、式 (33)の「 ν_k における観測輝度」はエアロゾルの光学特性の ν_k 依存性の影 響を受けているため、 $\Gamma_{\nu k}$ の値は純粋な地表面反射率の値ではなく、エアロゾルの光 学特性の波長依存性が $\Gamma_{\nu k}$ に含まれてしまう。そこで PPDF-S 法は、 Γ_i の式では表さ れなかった地表面反射率とエアロゾルの光学特性の波長依存性を表現するために、ポ リノミアル項: Π を導入し、式 (10)に基づいた以下の式によって、放射輝度のフォワー ド計算を行っている。

$$\boldsymbol{F}(\boldsymbol{x}) = -\ln\left(\boldsymbol{R'}\right) = -\ln\left(\left\langle S_{\nu}^{0} \cdot \boldsymbol{T}_{eff}\left(\boldsymbol{x}\right)\right\rangle\right) + \Pi$$
(34)

ここで、 S_{ν}^{o} は太陽入射輝度、 $T_{eff}(\mathbf{x})$ は式 (1)-(8) に従い状態ベクトル \mathbf{x} によって表され る大気の有効透過率である。ポリノミアル Π も \mathbf{x} 同様、 Π に関するアジョイントとヤコビア ンの式が用意されており、リトリーバル解析中に \mathbf{x} と同時に導出される。地表面反射率とエ アロゾルの光学特性のそれぞれの波長依存性をより正確に表現するには、地表面反射率を 波数ごとに推定した上で、エアロゾルの光学特性に対する Π の式を考えることも今後必要 であると考える。さらには、エアロゾル種ごとに光学特性の波長依存性をシミュレーション 解析で調べられるため、いったん大気中のエアロゾル種が判別できれば、種ごとに適切な Π の式を設定することができると考えられる。

次に、5.2.2 節で示した、西シベリア域で新たに解析されたデータの約 10% の 43 ケース で XCO₂ が 370~380 ppm の低い値であったことについて考察する。XCO₂ の解析値が低くな る理由として、3 つの理由が挙げられる; (1) CO₂ 濃度が実際に低いため、(2) PPDF-S リトリーバルで、airmass (空気の総質量、通常、地表気圧の値が対応)を実際の値よりも過大評価 しているため、(3) PPDF-S リトリーバルで、エアロゾルにより光路長が短くなった効果を

適切に推定できていないため。さらに、Fig. 17 で示したように、シミュレーション解析の結 果から、水を含む土地被覆に対して負の XCO₂バイアスが見られたことから、上記 3 つの理 由に加えて、43 ケースの観測時の GOSAT 視野内 (直径 10 km) での土地被覆に水域などが 存在したことも理由として考えられる。この点については、今後、気象条件や土壌水分量な どを調べることで、その妥当性を調査したい。以下、(1) から (3) について考察する。

もし 43 ケースの観測条件が清浄大気であった場合、(1) または (2) のどちらかが理由と なる。しかし、(1) については検証データが無いために確認できないものの、380 ppm 以下 の XCO₂値は、その年の XCO₂のバックグラウンドレベルと比較しても非常に小さいことか ら、実際にそのような値の濃度であったとは考えにくい。(2) については、もし実際よりも 大きな airmass すなわち地表面気圧を推定した場合、実際の大気中の CO₂の量は変わらない のに対して、全体の空気量を過大評価することになるため、CO₂の気柱平均量である XCO₂ は過小評価される。PPDF-S 法では、地表面気圧はリトリーバルしないため、地表面気圧の 初期値が直接 XCO₂の導出に用いられる。そのため、初期値が実際の地表面気圧よりも大き いことにより、XCO₂が過小評価された可能性がある。そこで、FP 法でリトリーバルされた 地表面気圧の値と PPDF-S 法で用いられた初期値を比較して、初期値の妥当性を調べた。そ の結果を Fig.36 に示す。ここで、灰色点は 3.3.3 節で述べた手法により新たに解析された全 データについての結果を、赤色点は改良後の PPDF-S 法で 370~380 ppm の低い XCO₂を解析 したデータに対する結果を示す。その結果、赤色点は黒色点と同じ傾向をもち、特段、地表 気圧の過大評価が見られないことから、370~380 ppm の低い XCO₂の解析値の理由は、(1) の PPDF-S 法での地表面気圧の設定ミスではない可能性が高いと結論付けられる。



Fig. 36. FP 法でリトリーバルされた地表面気圧の値と PPDF-S 法で用いられた初期値を比較 した結果。灰色点は新たに解析された全データについての結果を、赤色点は改良後の PPDF-S 法で 370~380 ppm の低い XCO₂を示したデータを示す。

最後に(3)として、Fig. 28, 29の α_{a} - α_{a}/ρ_{a} チャートで示されたように、43ケースでの観 測条件はエアロゾル(Soot)を含む大気であった可能性について検討した。Soot を含む大気 でも (1),(2) の理由が考えられるが、上記のようにそれらの可能性は低いため、Sootの働き によって光路長が短くなる効果についてのみ検討した。Soot が含まれる大気に対して、Fig. 35 に示したように、α。の初期値を決める式に最適値と考えられた 0.18 の値を用いてリト リーバルし、XCO2解析値がどのように変化するかを調べた。その結果、43 ケースのうち 18 ケースしか解析されなかったものの、その解析値は約 5 ppm 増加し、より現実的な値とな った。また、Fig. 25の RA プロダクトと比較した図でプロットされた全 393 ケースに対して もα。の初期値を再設定して解析したところ、解析されたケース数は169に減少したものの、 RA プロダクトとの相関は良くなった (Fig. 37)。このことから、 $\alpha_{a} - \alpha_{a} / \rho_{a}$ チャートから新 たに解析されたデータについては Soot を含む大気状態であるとの判定は妥当であり、α_αの 初期値をより適切な値に変えたことにより、より現実的な XCO2 が得られたと考えられる。 なお、43 ケースでの FP 法でリトリーバルされた AOT の値は 0.1 から 0.4 の範囲であり、そ のときの大気のエアロゾル濃度は必ずしも高かったとはいえない。しかし、Fig. 16 で示し たように、シミュレーション解析の結果によると、大気中に Soot が含まれていると、その AOT が小さくても負の XCO₂ バイアスを示す。そのため、43 ケースが観測されたときの大 気中に Soot が含まれていた場合、XCO2が過小評価された可能性はあると言える。



Fig. 37. PPDF-S 法で導出された XCO₂ と RA プロダクトとを比較した結果。 α_a の初期値を元の値に 0.18の値をかける前後での結果を、それぞれ左図と右図に示す。

以上の結果を踏まえ、改めてエアロゾルに関する PPDF パラメータの解析結果の AOT 依存性を調べた。Figure 38 は、シミュレーション解析において、波数依存性のない地表面反射率を 0.05 から 0.5 まで、光の波長 0.55 μ m での AOT を 0.05 から 1.0 まで、それぞれ 0.05 刻みで変化させたときの、 $\alpha_a - \alpha_a / \rho_a + \tau - h$ である。Figure 28 の灰色点で示した Soot の結果とあわせ、Rural、Urban、Dust-like についても示す。それぞれの結果に見られる、20 個のプロットの連なりは、黒矢印の方向に沿って AOT が大きな値に変化することで $\alpha_a \ge \alpha_a / \rho_a$ の値が変わる様子を示す。また、20 個のプロットの塊が 10 個見られるが、これは地表面反射率の違いである。右の塊ほど、反射率が小さいときの結果を表す。このように、AOT と、光反射を表す α_a と光の多重散乱を表す ρ_a との大小関係は、エアロゾル種や地表面反射率によって異なることがわかる。このことは、エアロゾルの量と光路長変動との関係性が非常に複雑であることを示している。しかし、Fig. 28, 29 の図の比較から、Fig.29 に示したGOSAT の観測時に Soot が存在していたという結論に影響はないと判断される。



Fig. 38. シミュレーション解析において、波数依存性のない地表面反射率を 0.05 から 0.5 まで、0.55 μ m での AOT を 0.05 から 1.0 まで、それぞれ 0.05 刻みで変化させたときの、 α_{a} - α_{a}/ρ_{a} チャート。黒矢印の方向に沿って、AOT が大きいときの結果を示す。

さらに、PPDF パラメータのエアロゾル層の高度への依存性を調べた。Table 4 で示したシ ミュレーションで考慮したエアロゾルモデルは、4 種のエアロゾル全て、高度 2 km まで混 合比が一定の鉛直分布をもつと仮定した。そこで、上記のエアロゾルモデルで仮定するエア ロゾルの高度を 2 km から 3 km に変えてシミュレーション解析し、Fig. 28 で示した α_o - α_o α/ρ_o チャートがどのように変化するかを調査した。その結果、 α_o および α_o/ρ_o の値は、 Rural, Urban, Soot, Dust-like に対してそれぞれ約 5 %, 2.5 %, 0.01 %, 3 %というわずかな変化 しか見られず、PPDF パラメータのエアロゾル層の高度への依存性は低いことがわかった。 そのため、 α_o - α_o/ρ_o チャートによってエアロゾル種を判別する方法は、エアロゾルを含 む様々な状況に対して適用可能であることが示唆された。

最後に、さらなる PPDF-S リトリーバル・アルゴリズムの改良に向けて議論する。Figure 18 では、PPDF-S 法でのフォワード計算の反復回数ごとに XCO₂解析値が変動する様子によ って大気中のエアロゾル種が Dust-like であると判別できる可能性を示した。また、Fig. 28, 29 の結果からは、 $\alpha_a - \alpha_a / \rho_a + r - r$ に基づいて各観測シーンの大気中のエアロゾル種を 識別することができる可能性があることが示された。さらに、Soot を含む大気での解析で 見られた負のバイアスは、 α_a の初期値を変えることで、その値を0に近づけることが可能 であることがわかった。そこで、これらの結果と本章での議論を踏まえた上で、Fig.7に示 したフローチャートに替えて、Fig. 39 に示すフローチャートにより、今後さらに高精度な XCO₂が解析できる PPDF-S リトリーバル・アルゴリズムとすることができると考える。



Fig. 39. エアロゾル種が判別できる場合の PPDF-S リトリーバル・アルゴリズムのフローチ ャート。Figure 7 に対しエアロゾル種が判別できた場合の処理を赤文字で追記してある。
7 結論

GOSAT は温室効果ガスを観測することを主目的とした初の人工衛星であり、大気中の CO₂と CH₄を観測している。また、2018 年 10 月 29 日にはその 2 号機の GOSAT-2 が打ち上 げられ、温室効果ガスの発生・消失源に関する理解が深まることが期待されている。本研究 は、この GOSAT センサで観測された放射輝度スペクトルからガス濃度を導出するリトリー バル手法のうち、解析の誤差要因となる光路長変動を独自の PPDF パラメータで表現する PPDF-S 法について改良を行い、エアロゾル高濃度域で XCO₂の解析精度を向上させること を目的とした。

XCO₂の解析誤差として、解析値と真値の差をバイアスとして定義する。これまでの研究 (e.g., Iwasaki et al., 2017)などから、このバイアスが大きくなる場合、CO₂の鉛直プロファ イルが異常な形を示したり、解析途中で不安定になったりすることでバイアスが大きくな るケースが多いことが分かった。そのため、この CO₂鉛直プロファイルを指標の一つとし、 リトリーバル解析手法の改良を試みた。具体的には、エアロゾル種や地表面反射率を変化さ セシミュレーションされた放射輝度スペクトルに対しリトリーバル解析を行い、CO₂鉛直プ ロファイルの形やバイアスの大きさにより、改良方法の評価を行った。

その方法の一つとして行ったのがリトリーバルに用いる波数チャンネルの選択である。 できるだけ各大気層に感度ピークを持つ波長を均等に選択することで解は安定化し、バイ アスが小さくなるケースもあったものの、全体として情報含有量が減り、大気全層の CO2濃 度変化に対して有意な解析結果とならないことが示されたため、本研究ではチャンネル選 択を実施しないという結論に達した。

次に、リトリーバルに用いる解析パラメータを適正化することでXCO₂バイアスの低減を 図った。PPDF-S法に基づくリトリーバル解析手法では、CO₂濃度とあわせ、光路長変動を表 すためのPPDFパラメータなど39個の物理量も同時にリトリーバルされる。しかし、それら のパラメータの初期値への拘束条件が必要以上に緩いと解が適切な値から離れ、それがCO₂ 濃度のリトリーバル結果に影響を与える可能性がある。これらのパラメータは次元も異な るため、直接比較ができないことから、これらのパラメータの影響の大きさを、その可動範 囲に対応する放射輝度の大きさ ($\mathbf{K} \cdot \sigma_{o}$)によって評価し、影響の大きさを、その可動範 条件を見つけ、これを適正化することとした。その結果、エアロゾルによる光の散乱を表す パラメータ (α_{o})の初期値への拘束条件が異常に緩いためにCO₂濃度のリトリーバル結果 に影響を与えていた可能性があることがわかった。このパラメータについて、様々なシミュ レーション解析の結果に基づき、その初期値 α_{o} と共分散値 σ_{o} を適正化した。

清浄大気を仮定したシミュレーション解析では、XCO₂バイアスは、適正化前は-0.47 ppm、 適正化後では-0.63 ppmとやや悪化したものの、4種のエアロゾル (Urban, Rural, Soot, Dustlike) を含む大気を仮定したシミュレーションでは大幅な改善が見られた。特に、地表面反 射率を0.2、AOTを1.0と仮定したとき、適正化前ではUrbanを含む大気ではリトリーバルでき なかったのに対し、適正化後では対流圏でのCO2濃度の異常な変動を抑えられた結果、全エ アロゾル種に対して妥当な解析値が得られた。ただし、XCO2バイアスはDust-like、Urban、 Ruralに対しては低減できたものの、Sootについては負の方向にバイアスの値が大きくなっ た。また、Dust-likeに対しては他のエアロゾル種と比べてバイアスの絶対値が大きかった。 この原因は、Dust-likeの粒径が比較的大きいために、XCO2解析に用いる波長でのAOTの値 が他のエアロゾル種の値と比べて4倍以上大きく、光散乱の影響を受けやすいためと考えら れる。シミュレーションに基づくリトリーバル解析の結果から、大気中にDust-likeが含まれ た場合、リトリーバル解析での反復回数ごとのXCO2解析値の変動の様子が特徴的であり、 反復回数1回目のXCO2解析値が最も真値に近いことがわかった。そのため、今後、Dust-like と判別できた場合は、反復回数1回目のXCO2解析値をリトリーバル結果として採用するで、 より高精度なXCO2の解析値を得るというアルゴリズムが考えられる。

改良した PPDF-S 法を西シベリア域のバイオマス・バーニング発生域で観測された GOSAT データの解析に適用したところ、煙の存在する条件下でリトリーバルできているケースも 含め、これまで解が得られず解析できなかったデータに対し、リトリーバル可能となったデ ータ数が約 70%と大幅に増加した。ただし、増加したデータ数の約 10%については、FP 法 の結果と比較して XCO2 値が 370 ppm~380 ppm と不自然に低い値を示していた。

本研究において特に注目すべき点として、解析された PPDF パラメータのうち、エアロゾ ルによる光の反射による光路長の減少の効果を表す α_a と、光の多重散乱による光路長の増 加の効果を現す ρ_a について、 α_a と α_a/ρ_a との相関関係 ($\alpha_a - \alpha_a/\rho_a + r - F$)を指標と して、CO₂解析に影響を与えたエアロゾル種を特定できる可能性があることが示唆された。 これは、シミュレーションにより得られる $\alpha_a - \alpha_a/\rho_a + r - F$ 上に観測データをプロット することで、どのエアロゾル種についての相関と同じかを判断することにより、エアロゾル 種を特定するものである。 $\alpha_a - \alpha_a/\rho_a + r - F$ は、エアロゾル層の高度の影響をあまり受 けないこともシミュレーションにより確認されていることから、非常に汎用的な指標とな り得るものと言える。これを西シベリア域のバイオマス・バーニング発生域で観測された GOSAT データ適用した例では、エアロゾル種は Soot タイプである可能性が示された。

ここで、シミュレーション解析において Soot を含む大気に対して負の XCO₂バイアスが 見られた原因を検討したところ、PPDF-S リトリーバルで、Soot により光路長が短くなった 効果を適切に推定できていないことが考えられた。そこで、地表面反射率や大気状態の違い など可能な限りの調査を行った上で、370 ppm~380 ppm と不自然に低い XCO₂値が解析さ れた原因は、Soot により光路長が短くなった効果を適切に推定できていなかったためと判 断し、 α_o の初期値を大きくして再度リトリーバルしたところ、XCO₂解析値は約 5 ppm 増 加し、より現実的な値となった。

以上の結果より、反復回数ごとの XCO₂ 解析値の変動の様子から Dust-like と判断する手法と合わせ、 $\alpha_o - \alpha_o / \rho_o$ チャートを用いた手法により、一度エアロゾル種を特定し、その上で、再度リトリーバル解析を行うときに、特定されたエアロゾル種に適した初期値設定な

どを行うことで、CO₂濃度の解析精度をさらに向上させることができる可能性があるアルゴ リズムを提示した。

今後、本研究で示した改良を施したPPDF-S法を、2018年10月29日に打ち上げられた GOSAT-2のデータ解析にも適用することが計画されている。特に、この衛星で新たに観測対 象となった一酸化炭素 (CO)の解析にも適用し、ガスとエアロゾルが同時に多く発生する 都市部やバイオマス・バーニング発生域でCO₂、CO、それにエアロゾルを同時観測すること で、都市部での人為起源のCO₂の発生量やバイオマス・バーニング域での炭素循環研究の推 定に貢献したいと考えている。

参考文献

- NASA/METI/AIST/Japan Spacesystems, and U.S./Japan ASTER Science Team (2001). ASTER Level 2 Surface Reflectance Product. NASA EOSDIS Land Processes DAAC, USGS Earth Resources Observation and Science (EROS) Center: Sioux Falls, SD, USA. Available online: https://lpdaac.usgs.gov (accessed on 14 October 2018).
- Toon, G.C. (Jet Propulsion Laboratory, California Institute of Technology, Pasadena, MA, USA). Personal communication, 2011.,
- Kurucz, R.L. (Harvard-Smithsonian Center for Astrophysics, Cambridge, MA, USA). Personal communication, 2008.,
- Bösch, H., Toon, G. C., Sen, B., Washenfelder, R. A., Wennberg, P. O., Buchwitz, M., de Beek, R., Burrows,
 J. P., Crisp, D., Christi, M., Connor, B. J., Natraj, V., and Yung, Y. L.: Space-based near-infrared CO₂ measurements: Testing the Orbiting Carbon Observatory retrieval algorithm and validation concept using SCIAMACHY observations over Park Falls, Wisconsin, J. Geophys. Res., 111, 10.1029/2006JD007080, 2006.
- Baker, D. F., Law, R. M., Gurney, K. R., Rayner, P., Peylin, P., Denning, A. S., Bousquet, P., Bruhwiler, L., Chen, Y. H., Ciais, P., Fung, I. Y., Heimann, M., John, J., Maki, T., Maksyutov, S., Masarie, K., Prather, M., Pak, B., Taguchi, S., and Zhu, Z.: TransCom 3 inversion intercomparison: Impact of transport model errors on the interannual variability of regional CO₂ fluxes, 1988–2003, Global Biogeochemical Cycles, 20, 10.1029/2004GB002439, 2006.
- Boesch, H., Baker, D., Connor, B., Crisp, D., and Miller, C.: Global Characterization of CO₂ Column Retrievals from Shortwave-Infrared Satellite Observations of the Orbiting Carbon Observatory-2 Mission, Remote Sensing, 3, 10.3390/rs3020270, 2011.
- Boesch, H., Brown, L., Castano, R., Christi, M., Connor, B., Crisp, D., Eldering, A., Fisher, B., Frankenberg, C., Gunson, M., Granat, R., McDuffie, J., Miller, C., Natraj, V., O'Brien, D., O'Dell, C., Osterman, G., Oyafuso, F., Payne, V., Polonsky, I., Smyth, M., Spurr, R., Thompson, D., and Toon, G.: OCO (Orbiting Carbon Observatory) 2 Level 2 Full Physics Retrieval Algorithm Theoretical Basis Document, Pasadena, CA. Available online: https://disc.gsfc.nasa.gov/OCO-2/documentation/oco-2-v6/OCO2 L2 ATBD.V6.pdf (accessed on 1 October 2018), 2015.
- Bovensmann, H., Buchwitz, M., Burrows, J. P., Reuter, M., Krings, T., Gerilowski, K., Schneising, O., Heymann, J., Tretner, A., and Erzinger, J.: A remote sensing technique for global monitoring of power plant CO₂ emissions from space and related applications, Atmos. Meas. Tech., 3, 781-811, 10.5194/amt-3-781-2010, 2010.
- Bril, A., Oshchepkov, S., Yokota, T., and Inoue, G.: Parameterization of aerosol and cirrus cloud effects on reflected sunlight spectra measured from space: application of the equivalence theorem, Appl. Opt., 46, 2460-2470, 10.1364/AO.46.002460, 2007.

- Bril, A., Oshchepkov, S., and Yokota, T.: Correction of atmospheric scattering effects in space-based observations of carbon dioxide: Model study of desert dust aerosol, J. Quant. Spectros. Radiat. Transfer, 109, 1815-1827, http://dx.doi.org/10.1016/j.jqsrt.2008.02.012, 2008.
- Bril, A., Oshchepkov, S., and Yokota, T.: Application of a probability density function-based atmospheric light-scattering correction to carbon dioxide retrievals from GOSAT over-sea observations, Remote Sensing of Environment, 117, 301-306, 10.1016/j.rse.2011.10.005, 2012.
- Buchwitz, M., de Beek, R., Burrows, J. P., Bovensmann, H., Warneke, T., Notholt, J., Meirink, J. F., Goede, A. P. H., Bergamaschi, P., Körner, S., Heimann, M., and Schulz, A.: Atmospheric methane and carbon dioxide from SCIAMACHY satellite data: initial comparison with chemistry and transport models, Atmos. Chem. Phys., 5, 941-962, 10.5194/acp-5-941-2005, 2005.
- Butz, A., Hasekamp, O. P., Frankenberg, C., and Aben, I.: Retrievals of atmospheric CO₂ from simulated space-borne measurements of backscattered near-infrared sunlight: accounting for aerosol effects, Appl. Opt., 48, 3322-3336, 10.1364/AO.48.003322, 2009.
- Butz, A., Guerlet, S., Hasekamp, O., Schepers, D., Galli, A., Aben, I., Frankenberg, C., Hartmann, J. M., Tran, H., Kuze, A., Keppel-Aleks, G., Toon, G., Wunch, D., Wennberg, P., Deutscher, N., Griffith, D., Macatangay, R., Messerschmidt, J., Notholt, J., and Warneke, T.: Toward accurate CO₂ and CH₄ observations from GOSAT, Geophys. Res. Lett., 38, 10.1029/2011gl047888, 2011.
- Chédin, A., Serrar, S., Scott, N. A., Crevoisier, C., and Armante, R.: First global measurement of midtropospheric CO₂ from NOAA polar satellites: Tropical zone, J. Geophys. Res., 108, 10.1029/2003JD003439, 2003.
- Chédin, A., Serrar, S., Scott, N. A., Pierangelo, C., and Ciais, P.: Impact of tropical biomass burning emissions on the diurnal cycle of upper tropospheric CO₂ retrieved from NOAA 10 satellite observations, J. Geophys. Res., 110, 10.1029/2004JD005540, 2005.
- Chahine, M. T., Pagano, T. S., Aumann, H. H., Atlas, R., Barnet, C., Blaisdell, J., Chen, L., Divakarla, M., Fetzer, E. J., Goldberg, M., Gautier, C., Granger, S., Hannon, S., Irion, F. W., Kakar, R., Kalnay, E., Lambrigtsen, B. H., Lee, S.-Y., Le Marshall, J., McMillan, W. W., McMillin, L., Olsen, E. T., Revercomb, H., Rosenkranz, P., Smith, W. L., Staelin, D., Strow, L. L., Susskind, J., Tobin, D., Wolf, W., and Zhou, L.: AIRS, Bulletin of the American Meteorological Society, 87, 911-926, 10.1175/BAMS-87-7-911, 2006.
- Chevallier, F., Engelen, R. J., Carouge, C., Conway, T. J., Peylin, P., Pickett-Heaps, C., Ramonet, M., Rayner, P. J., and Xueref-Remy, I.: AIRS-based versus flask-based estimation of carbon surface fluxes, J. Geophys. Res., 114, doi:10.1029/2009JD012311, 2009a.
- Chevallier, F., Maksyutov, S., Bousquet, P., Bréon, F.-M., Saito, R., Yoshida, Y., and Yokota, T.: On the accuracy of the CO₂ surface fluxes to be estimated from the GOSAT observations, Geophys. Res. Lett., 36, 10.1029/2009gl040108, 2009b.
- Cogan, A. J., Boesch, H., Parker, R. J., Feng, L., Palmer, P. I., Blavier, J. F. L., Deutscher, N. M., Macatangay,

R., Notholt, J., Roehl, C., Warneke, T., and Wunch, D.: Atmospheric carbon dioxide retrieved from the Greenhouse gases Observing SATellite (GOSAT): Comparison with ground-based TCCON observations and GEOS-Chem model calculations, J. Geophys. Res., 117, n/a-n/a, 10.1029/2012jd018087, 2012.

- Crisp, D., Fisher, B. M., O'Dell, C., Frankenberg, C., Basilio, R., Bösch, H., Brown, L. R., Castano, R., Connor, B., Deutscher, N. M., Eldering, A., Griffith, D., Gunson, M., Kuze, A., Mandrake, L., McDuffie, J., Messerschmidt, J., Miller, C. E., Morino, I., Natraj, V., Notholt, J., O'Brien, D. M., Oyafuso, F., Polonsky, I., Robinson, J., Salawitch, R., Sherlock, V., Smyth, M., Suto, H., Taylor, T. E., Thompson, D. R., Wennberg, P. O., Wunch, D., and Yung, Y. L.: The ACOS CO2 retrieval algorithm – Part II: Global XCO2 data characterization, Atmos. Meas. Tech., 5, 687-707, 10.5194/amt-5-687-2012, 2012.
- Guerlet, S., Butz, A., Schepers, D., Basu, S., Hasekamp, O. P., Kuze, A., Yokota, T., Blavier, J. F., Deutscher, N. M., Griffith, D. W. T., Hase, F., Kyro, E., Morino, I., Sherlock, V., Sussmann, R., Galli, A., and Aben, I.: Impact of aerosol and thin cirrus on retrieving and validating XCO₂ from GOSAT shortwave infrared measurements J. Geophys. Res., 118, 4887-4905, 10.1002/jgrd.50332, 2013.
- Imasu, R.: 人工衛星による大気成分濃度の測定, 資源と環境, 1, 11-22, 1992.
- Imasu, R., Ogawa, T., and Shimoda, H.: Meridional distribution feature of minor constituents as observed by IMG sensor aboard ADEOS satellite, Advances in Space Research, 25, 959-962, 10.1016/S0273-1177(99)00929-1, 2000.
- Iwasaki, C., Imasu, R., Bril, A., Yokota, T., Yoshida, Y., Morino, I., Oshchepkov, S., Wunch, D., Griffith, D. W. T., Deutscher, N. M., Kivi, R., Pollard, D., Roehl, C. M., Velazco, V. A., Sussmann, R., Warneke, T., and Notholt, J.: Validation of GOSAT SWIR XCO₂ and XCH₄ Retrieved by PPDF-S Method and Comparison with Full Physics Method, SOLA, 13, 168-173, 10.2151/sola.2017-031, 2017.
- Jung, Y., Kim, J., Kim, W., Boesch, H., Lee, H., Cho, C., and Goo, T.-Y.: Impact of Aerosol Property on the Accuracy of a CO₂ Retrieval Algorithm from Satellite Remote Sensing, Remote Sensing, 8, 10.3390/rs8040322, 2016.
- Kaufman, Y. J., Tucker, C. J., and Fung, I.: Remote sensing of biomass burning in the tropics, J. Geophys. Res., 95, 9927-9939, doi:10.1029/JD095iD07p09927, 1990.
- Kim, W., Kim, J., Jung, Y., Boesch, H., Lee, H., Lee, S., Goo, T.-Y., Jeong, U., Kim, M., Cho, C.-H., and Ou, M.-L.: Retrieving XCO₂ from GOSAT FTS over East Asia Using Simultaneous Aerosol Information from CAI, Remote Sensing, 8, 10.3390/rs8120994, 2016.
- Kulawik, S. S., Jones, D. B. A., Nassar, R., Irion, F. W., Worden, J. R., Bowman, K. W., Machida, T., Matsueda, H., Sawa, Y., Biraud, S. C., Fischer, M. L., and Jacobson, A. R.: Characterization of Tropospheric Emission Spectrometer (TES) CO₂ for carbon cycle science, Atmos. Chem. Phys., 10, 5601-5623, 10.5194/acp-10-5601-2010, 2010.
- Kuze, A., Suto, H., Nakajima, M., and Hamazaki, T.: Thermal and near infrared sensor for carbon

observation Fourier-transform spectrometer on the Greenhouse Gases Observing Satellite for greenhouse gases monitoring, Appl. Opt., 48, 6716, 10.1364/ao.48.006716, 2009.

- Morino, I., Uchino, O., Inoue, M., Yoshida, Y., Yokota, T., Wennberg, P. O., Toon, G. C., Wunch, D., Roehl, C. M., Notholt, J., Warneke, T., Messerschmidt, J., Griffith, D. W. T., Deutscher, N. M., Sherlock, V., Connor, B., Robinson, J., Sussmann, R., and Rettinger, M.: Preliminary validation of column-averaged volume mixing ratios of carbon dioxide and methane retrieved from GOSAT short-wavelength infrared spectra, Atmos. Meas. Tech., 4, 1061-1076, 10.5194/amt-4-1061-2011, 2011.
- Nassar, R., Jones, D. B. A., Kulawik, S. S., Worden, J. R., Bowman, K. W., Andres, R. J., Suntharalingam, P., Chen, J. M., Brenninkmeijer, C. A. M., Schuck, T. J., Conway, T. J., and Worthy, D. E.: Inverse modeling of CO₂ sources and sinks using satellite observations of CO₂ from TES and surface flask measurements, Atmos. Chem. Phys., 11, 6029-6047, 10.5194/acp-11-6029-2011, 2011.
- O'Dell, C. W., Connor, B., Bösch, H., O'Brien, D., Frankenberg, C., Castano, R., Christi, M., Eldering, D., Fisher, B., Gunson, M., McDuffie, J., Miller, C. E., Natraj, V., Oyafuso, F., Polonsky, I., Smyth, M., Taylor, T., Toon, G. C., Wennberg, P. O., and Wunch, D.: The ACOS CO₂ retrieval algorithm – Part 1: Description and validation against synthetic observations, Atmos. Meas. Tech., 5, 99-121, 10.5194/amt-5-99-2012, 2012.
- Oshchepkov, S., Bril, A., and Yokota, T.: PPDF-based method to account for atmospheric light scattering in observations of carbon dioxide from space, J. Geophys. Res., 113, D23210, 10.1029/2008jd010061, 2008.
- Oshchepkov, S., Bril, A., and Yokota, T.: An improved photon path length probability density function– based radiative transfer model for space-based observation of greenhouse gases, J. Geophys. Res., 114, D19207, 10.1029/2009jd012116, 2009.
- Oshchepkov, S., Bril, A., Maksyutov, S., and Yokota, T.: Detection of optical path in spectroscopic spacebased observations of greenhouse gases: Application to GOSAT data processing, J. Geophys. Res., 116, D14304, 10.1029/2010jd015352, 2011.
- Oshchepkov, S., Bril, A., Yokota, T., Morino, I., Yoshida, Y., Matsunaga, T., Belikov, D., Wunch, D., Wennberg, P., Toon, G., O'Dell, C., Butz, A., Guerlet, S., Cogan, A., Boesch, H., Eguchi, N., Deutscher, N., Griffith, D., Macatangay, R., Notholt, J., Sussmann, R., Rettinger, M., Sherlock, V., Robinson, J., Kyrö, E., Heikkinen, P., Feist, D. G., Nagahama, T., Kadygrov, N., Maksyutov, S., Uchino, O., and Watanabe, H.: Effects of atmospheric light scattering on spectroscopic observations of greenhouse gases from space: Validation of PPDF-based CO₂ retrievals from GOSAT, J. Geophys. Res., 117, n/a-n/a, 10.1029/2012jd017505, 2012.
- Oshchepkov, S., Bril, A., Yokota, T., Wennberg, P. O., Deutscher, N. M., Wunch, D., Toon, G. C., Yoshida,
 Y., O'Dell, C. W., Crisp, D., Miller, C. E., Frankenberg, C., Butz, A., Aben, I., Guerlet, S., Hasekamp,
 O., Boesch, H., Cogan, A., Parker, R., Griffith, D., Macatangay, R., Notholt, J., Sussmann, R.,
 Rettinger, M., Sherlock, V., Robinson, J., Kyrö, E., Heikkinen, P., Feist, D. G., Morino, I., Kadygrov,

N., Belikov, D., Maksyutov, S., Matsunaga, T., Uchino, O., and Watanabe, H.: Effects of atmospheric light scattering on spectroscopic observations of greenhouse gases from space. Part 2: Algorithm intercomparison in the GOSAT data processing for CO₂ retrievals over TCCON sites, J. Geophys. Res., 118, 1493-1512, 10.1002/jgrd.50146, 2013a.

- Oshchepkov, S., Bril, A., Yokota, T., Yoshida, Y., Blumenstock, T., Deutscher, N. M., Dohe, S., Macatangay, R., Morino, I., Notholt, J., Rettinger, M., Petri, C., Schneider, M., Sussman, R., Uchino, O., Velazco, V., Wunch, D., and Belikov, D.: Simultaneous retrieval of atmospheric CO₂ and light path modification from space-based spectroscopic observations of greenhouse gases: methodology and application to GOSAT measurements over TCCON sites, Appl. Opt., 52, 1339-1350, 10.1364/AO.52.001339, 2013b.
- Oshchepkov, S., Bril, A., and Yokota, T.: ALGORITHM THEORETICAL BASIS DOCUMENT (ATBD) FOR PPDF-BASED CO₂ and CH₄ COLUMUN AMOUNTS RETRIEVAL FROM GOSAT TANSO-FTS SWIR, Center for Global Environmental Research, National Institute for Environmental Studies, Japan. Available online:

https://data2.gosat.nies.go.jp/GosatDataArchiveService/doc/RA/ATBD_FTSPPDF-SL2_V1.0_en.pdf (accessed on 1 October 2018), 2018.

- Ota, Y., Higurashi, A., Nakajima, T., and Yokota, T.: Matrix formulations of radiative transfer including the polarization effect in a coupled atmosphere-ocean system, J. Quant. Spectros. Radiat. Transfer, 111, 878-894, 2010.
- Ota, Y., and Imasu, R.: CO₂ Retrieval Using Thermal Infrared Radiation Observation by Interferometric Monitor for Greenhouse Gases (IMG) Onboard Advanced Earth Observing Satellite (ADEOS), Journal of the Meteorological Society of Japan. Ser. II, 94, 471-490, 10.2151/jmsj.2016-027, 2016.
- Rodgers, C. D.: Inverse Methods for Atmospheric Sounding, Series on Atmospheric, Oceanic and Planetary Physics, Volume 2, WORLD SCIENTIFIC, 256 pp., 2000.
- Rokotyan, N. V., Imasu, R., Zakharov, V. I., Gribanov, K. G., and Khamatnurova, M. Y.: The amplitude of the CO₂ seasonal cycle in the atmosphere of the Ural region retrieved from ground-based and satellite near-IR measurements, Atmospheric and Oceanic Optics, 28, 49-55, 10.1134/S102485601501011X, 2015.
- Rothman, L. S., Jacquemart, D., Barbe, A., Chris Benner, D., Birk, M., Brown, L. R., Carleer, M. R., Chackerian, C., Chance, K., Coudert, L. H., Dana, V., Devi, V. M., Flaud, J. M., Gamache, R. R., Goldman, A., Hartmann, J. M., Jucks, K. W., Maki, A. G., Mandin, J. Y., Massie, S. T., Orphal, J., Perrin, A., Rinsland, C. P., Smith, M. A. H., Tennyson, J., Tolchenov, R. N., Toth, R. A., Vander Auwera, J., Varanasi, P., and Wagner, G.: The HITRAN 2004 molecular spectroscopic database, J. Quant. Spectros. Radiat. Transfer, 96, 139-204, 10.1016/j.jqsrt.2004.10.008, 2005.
- Saitoh, N., Imasu, R., Ota, Y., and Niwa, Y.: CO₂ retrieval algorithm for the thermal infrared spectra of the Greenhouse Gases Observing Satellite: Potential of retrieving CO₂ vertical profile from highresolution FTS sensor, J. Geophys. Res., 114, D17305, 10.1029/2008JD011500, 2009.

- Saitoh, N., Kimoto, S., Sugimura, R., Imasu, R., Kawakami, S., Shiomi, K., Kuze, A., Machida, T., Sawa, Y., and Matsueda, H.: Algorithm update of the GOSAT/TANSO-FTS thermal infrared CO₂ product (version 1) and validation of the UTLS CO₂ data using CONTRAIL measurements, Atmos. Meas. Tech., 9, 2119-2134, 10.5194/amt-9-2119-2016, 2016.
- Super, I., Denier van der Gon, H. A. C., van der Molen, M. K., Sterk, H. A. M., Hensen, A., and Peters, W.: A multi-model approach to monitor emissions of CO2 and CO in an urban-industrial complex, Atmos. Chem. Phys. Discuss., 2016, 1-31, 10.5194/acp-2016-807, 2016.
- Takagi, H., Houweling, S., Andres, R. J., Belikov, D., Bril, A., Boesch, H., Butz, A., Guerlet, S., Hasekamp,
 O., Maksyutov, S., Morino, I., Oda, T., O'Dell, C. W., Oshchepkov, S., Parker, R., Saito, M., Uchino,
 O., Yokota, T., Yoshida, Y., and Valsala, V.: Influence of differences in current GOSAT XCO₂ retrievals
 on surface flux estimation, Geophys. Res. Lett., 41, 2598-2605, 10.1002/2013gl059174, 2014.
- Wunch, D., Wennberg, P. O., Toon, G. C., Connor, B. J., Fisher, B., Osterman, G. B., Frankenberg, C., Mandrake, L., O'Dell, C., Ahonen, P., Biraud, S. C., Castano, R., Cressie, N., Crisp, D., Deutscher, N. M., Eldering, A., Fisher, M. L., Griffith, D. W. T., Gunson, M., Heikkinen, P., Keppel-Aleks, G., Kyrö, E., Lindenmaier, R., Macatangay, R., Mendonca, J., Messerschmidt, J., Miller, C. E., Morino, I., Notholt, J., Oyafuso, F. A., Rettinger, M., Robinson, J., Roehl, C. M., Salawitch, R. J., Sherlock, V., Strong, K., Sussmann, R., Tanaka, T., Thompson, D. R., Uchino, O., Warneke, T., and Wofsy, S. C.: A method for evaluating bias in global measurements of CO₂ total columns from space, Atmos. Chem. Phys., 11, 12317-12337, 10.5194/acp-11-12317-2011, 2011.
- Yang, D., Liu, Y., Cai, Z., Chen, X., Yao, L., and Lu, D.: First Global Carbon Dioxide Maps Produced from TanSat Measurements, Advances in Atmospheric Sciences, 35, 621-623, 10.1007/s00376-018-7312-6, 2018.
- Yokota, T., Yoshida, Y., Eguchi, N., Ota, Y., Tanaka, T., Watanabe, H., and Maksyutov, S.: Global Concentrations of CO₂ and CH₄ Retrieved from GOSAT: First Preliminary Results, SOLA, 5, 160-163, 10.2151/sola.2009-041, 2009.
- Yoshida, Y., Oguma, H., Morino, I., Suto, H., Kuze, A., and Yokota, T.: Mountaintop observation of CO₂ absorption spectra using a short wavelength infrared Fourier transform spectrometer, Appl. Opt., 49, 71-79, 10.1364/AO.49.000071, 2010.
- Yoshida, Y., Ota, Y., Eguchi, N., Kikuchi, N., Nobuta, K., Tran, H., Morino, I., and Yokota, T.: Retrieval algorithm for CO₂ and CH₄ column abundances from short-wavelength infrared spectral observations by the Greenhouse gases observing satellite, Atmos. Meas. Tech., 4, 717-734, 10.5194/amt-4-717-2011, 2011.
- Yoshida, Y., Kikuchi, N., Morino, I., Uchino, O., Oshchepkov, S., Bril, A., Saeki, T., Schutgens, N., Toon,
 G. C., Wunch, D., Roehl, C. M., Wennberg, P. O., Griffith, D. W. T., Deutscher, N. M., Warneke, T.,
 Notholt, J., Robinson, J., Sherlock, V., Connor, B., Rettinger, M., Sussmann, R., Ahonen, P., Heikkinen,
 P., Kyrö, E., Mendonca, J., Strong, K., Hase, F., Dohe, S., and Yokota, T.: Improvement of the retrieval

algorithm for GOSAT SWIR XCO₂ and XCH₄ and their validation using TCCON data, Atmos. Meas. Tech., 6, 1533-1547, 10.5194/amt-6-1533-2013, 2013.

- Zhou, M., Dils, B., Wang, P., Detmers, R., Yoshida, Y., O'Dell, C. W., Feist, D. G., Velazco, V. A., Schneider, M., and De Mazière, M.: Validation of TANSO-FTS/GOSAT XCO2 and XCH4 glint mode retrievals using TCCON data from near-ocean sites, Atmos. Meas. Tech., 9, 1415-1430, 10.5194/amt-9-1415-2016, 2016.
- 柴田,清::光の気象学,応用気象学シリーズ,1,朝倉書店,1999.

謝辞

本研究を進めるにあたり、多くの方々のご指導とご支援がありましたことを、この場を借 りて厚く御礼申し上げます。

指導教員の今須良一教授は、本研究を進める上で、数あまたの、そして長時間にわたる議 論の場を設けてくださいました。さらに、リトリーバル研究の基本からその分野の最先端ま でを教授してくださいました。自身の性格を理解してくださってのきめ細やかなご指導に 対し、最上の感謝の意をここに表します。

PPDF-Sリトリーバル・アルゴリズムの実施は、Institute of Physics of National Academy of Sciences of BelarusのAndrey Bril氏の協力なしでは為し得ませんでした。氏には2016年の半年間、東京大学 大気海洋研究所に来ていただきました。その間、数多くの議論をしていただいたことに感謝申し上げます。

本研究で使用したGOSATデータとデータ処理プログラムは、国立環境研究所より特別に 提供していただきました。GOSATプロジェクトリーダーの横田達也氏、吉田幸生氏をはじ め、富士通エフ・アイ・ピー株式会社の中村東奈氏に対し、感謝申し上げます。

TCCON データは、TCCON Data Archive (doi:10.14291/tccon.archive/1348407) よりダウンロ ードしました。有益なデータを無料で配布している Carbon Dioxide Information Analysis Center (CDIAC) に感謝致します。ABSCO データは、NASA の Jet Propulsion Laboratory (JPL) グル ープより提供を受けました。ロシア Yekaterinburg での XCO₂ データは、国立ウラル大学よ り提供していただきました。

最後に、家族たちの日々の見守りに感謝致します。